

戦略的創造研究推進事業（社会技術研究開発）  
研究開発領域「犯罪からの子どもの安全」  
研究開発プログラム「犯罪からの子どもの安全」  
研究開発プロジェクト「犯罪からの子どもの安全を  
目指したe-learningシステムの開発」

## 研究開発実施終了報告書

研究開発期間 平成19年10月～平成24年9月

藤田大輔

(大阪教育大学・学校危機メンタルサポートセンター長・  
前大阪教育大学附属池田小学校長)

## 目 次

1. 研究開発プロジェクト	3
2. 研究開発実施の要約	4
2-1. 研究開発目標	4
2-2. 実施項目・内容	4
2-3. 主な結果・成果	5
2-3-1. 基礎研究から得られた主な成果	5
2-3-2. 作成したe-learningシステムの概要	9
2-3-3. 実証実験の概要と成果	12
2-4. 研究開発実施体制	17
3. 研究開発実施の具体的内容	18
3-1. 研究開発目標	18
3-2. 実施項目	20
3-3. 研究開発結果・成果	21
3-3-1. 基礎研究結果とその成果	21
3-3-2. 教材とその使用状況	23
3-3-3. 児童アンケートの概要	24
3-3-3-1. 低学年アンケートの分析結果	25
3-3-3-2. 中学年アンケートの分析結果	32
3-3-3-3. 高学年アンケートの分析結果	37
3-3-4. 保護者アンケートの概要	40
3-3-5. 教員アンケートの概要	43
3-3-6. 学習指導案	46
3-4. 今後の成果の活用・展開に向けた状況	50
3-5. プロジェクトを終了して	51
4. 研究開発実施体制	53
4-1. 体制	53
4-2. 研究開発実施者	54
4-3. 研究開発の協力者	57
5. 成果の発信やアウトリーチ活動など	58
5-1. ワークショップ等	58
5-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	59
5-3. 論文発表	61
5-4. 口頭発表	62
5-5. 新聞報道・投稿、受賞等	65
5-6. 特許出願	65

## 1. 研究開発プロジェクト

(1)研究開発領域：犯罪からの子どもの安全

(2)領域総括：片山恒雄

(3)研究代表者：藤田大輔

(4)研究開発プロジェクト名：

犯罪からの子どもの安全を目指したe-learningシステムの開発

(5)研究開発期間：平成19年10月～平成24年9月

## 2. 研究開発実施の要約

### 2-1. 研究開発目標

本研究開発では、小学校児童に主体的な防犯意識を芽生えさせるための効果的な安全教育のe-learning教材を開発する。また、その使用効果についても検証した上で、期間内に内容の充実をはかり、最終的にWeb上で無償<sup>注)</sup>公開することを目標とする。

注)当初、教材を完全無償公開することを目標としていたが、実際の運用を行うためにはサーバーの維持費用や情報セキュリティを維持するための人的コスト面の問題が生じることが判明した。研究開発期間終了後においては、そのための費用の調達が難しいことから、システムの運用については外部企業に委託することとした。委託先の企業は、教育委員会等と契約を行うことにより、各学校では実質的に無償で教材を使用できる。なお、システムの運用は企業に委託するが、社会情勢を踏まえた教材内容の見直し等については、本研究開発に携わったプロジェクト実施者が引き続き行うこととする。具体的には、新たに大阪教育大学学校危機メンタルサポート内にプロジェクト事業を立ち上げて、定期的に会合を持って教材内容の見直しを行うとともに、教材を使用する学校に対して教材の理念を理解した上で活用していただくための研修を行う。

### 2-2. 実施項目・内容

教材開発にあたっては、以下のステップをとる。

#### <第一段階> 基礎研究段階

- ・ 子どもの安全学習に関する先進的な事例や研究知見を収集する
- ・ 子どもの学習に有効なe-learningシステムの活用法を検討する
- ・ 子どもに求められる防犯能力の概念定義を行う
- ・ 子どもの防犯能力を測定するための指標を開発する
- ・ 子どもの安全への気づきに関する調査を実施する
- ・ 子どもの通学路歩行時の動作や視線を分析する

5グループ体制で実施

#### <第二段階> 教材開発段階

- ・ 基礎研究の知見をまとめて、e-learning教材開発を行う
- ・ 教材使用効果を評価するための質問紙を開発する
- ・ 実験協力校を決定する

以降、1グループ体制

#### <第三段階> 実証実験、教材完成段階

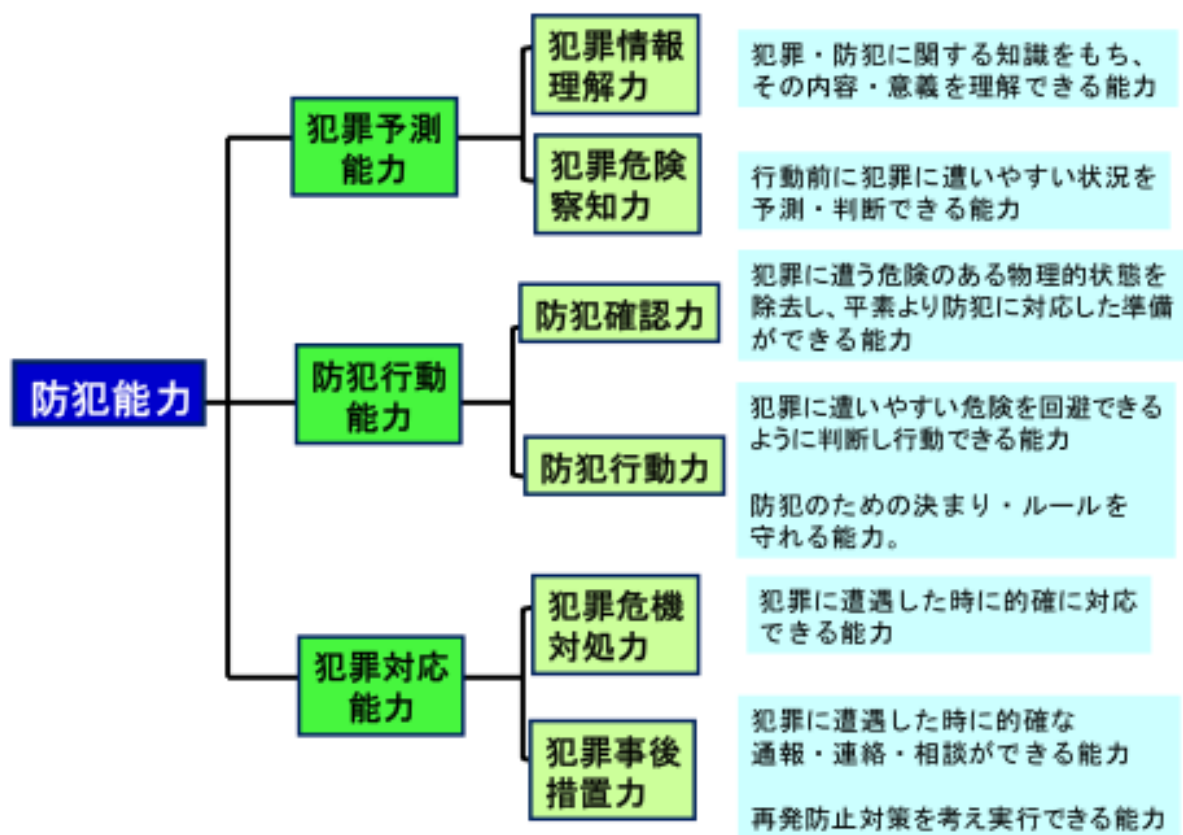
- ・ 教材の使用効果を検討するための実証実験を実施する
- ・ 実証実験結果に基づいて教材を修正し、完成する
- ・ 本研究開発教材の理念を生かした安全教育を実施するための学習指導案を作成する
- ・ プロジェクト終了後の運用形態を確定する

## 2-3. 主な結果・成果

### 2-3-1. 基礎研究から得られた主な成果

◎子どもの防犯能力に関わる概念構造の検討（刈間グループ）

日本安全教育学会が提唱する「安全能力の概念と構造」に基づき、小学生が備えるべき「防犯能力の概念と構造」を定義した。また、e-learningシステムのコンテンツ作成に役立てるため、小学校の低学年・中学年・高学年別に防犯教育の内容を具体的に体系化する作業を行った。防災教育内容の具体化にあたっては、小学生の防犯に関わる書籍を分析した。加えて、小学校教員が小学生にどのような防犯の内容を教育すべきだと感じているかに関するアンケート調査を実施した。以上の内容を踏まえて、小学生に対する安全教育の内容を整理した。



防犯能力の概念と構造

◎防犯能力の測定指標の開発（西岡グループ）

子どもが備えるべき防犯能力の測定方法について検討を行った。初めに、先行研究における評価法を分析した結果、行動意図や行動実施状況に関するアンケート調査、インタビュー、シミュレーション場面での行動測定、ロールプレイングなどが中心であった。これらを、刈間グループで整理された安全教育内容と対応づけ、かつe-learningシステムで安全学習をする際に評価可能な内容に絞り込んだ結果、最終的に以下の指標案が作成された。

防犯能力測定指標(案)

【場所(自宅外)】

- |                    |                  |
|--------------------|------------------|
| ①危険な場所(や状況, 行動)を知る | ⑦明るい道を通る         |
| ②避難場所を知る           | ⑧見通しの良い道を通る      |
| ③個人情報知らせない         | ⑨通学路を守る          |
| ④危険を予測する           | ⑩周囲を知覚する         |
| ⑤自分の予定を(保護者に)伝える   | ⑪危険な雰囲気のある場所を避ける |
| ⑥一人にならない           |                  |

【不審者対処】

- |            |           |
|------------|-----------|
| ①危険な誘い方を知る | ⑤声をあげる    |
| ②誘う人に近づかない | ⑥防犯ブザーを使う |
| ③誘いに乗らない   | ⑦助けを求める   |
| ④逃げる       |           |

【自宅】

- |                |                |
|----------------|----------------|
| ①不審な訪問の仕方を知る   | ④不審電話の仕方を知る    |
| ②他人を(家の中に)入れない | ⑤確かな電話以外は対応しない |
| ③不審電話の危険を知る    |                |

【インターネット】

- |                     |                 |
|---------------------|-----------------|
| ①不適切なアクセスの危険を知る     | ③アクセス先を保護者に相談する |
| ②(家庭で)決められたアクセス先を守る |                 |

【共通】

- |                       |             |
|-----------------------|-------------|
| ①日頃から保護者とコミュニケーションをとる | ②発生後大人に知らせる |
|-----------------------|-------------|

## ◎子どもの安全意識の構造解析（木宮グループ）

初めに、全国から51校（17,721名）を抽出した小学生の安全意識に関する調査の結果、安全行動の実施程度には学年差があることが明らかになり、発達段階を踏まえた教育内容を考案することの重要性が示された。また、防犯ブザーを所持している児童は安全行動を取りやすい一方、携帯電話の所持は必ずしも安全行動と関係していなかった。加えて、安全教育を実施することが必ずしも児童の安全行動につながらないことも明らかにされた。特にイベント的に1回だけ行われるような防犯教育の効果が乏しく、継続的な実施が必要であることが示唆された。

次に、全国から10校（2,977名）を抽出して、児童に映像やイラストを提示し、潜在的な危険についてどのように考えるのかを確認するための調査を行った。その結果、低学年では交通安全に関する気づきが多く、危険因子（車など）にのみ注意が向きがちであるが、中学年や高学年では防犯に関する気づきが増えるとともに、危険因子に加えて安全因子（自分たちを守ってくれる存在など）にも気づきやすくなることが示された。

### 調査に使用したイラスト

①声かけ(女性版)



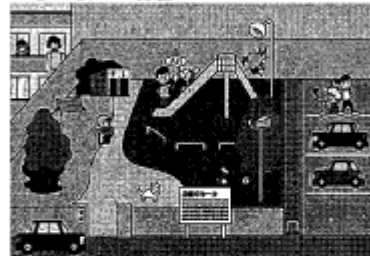
①声かけ(男性版)



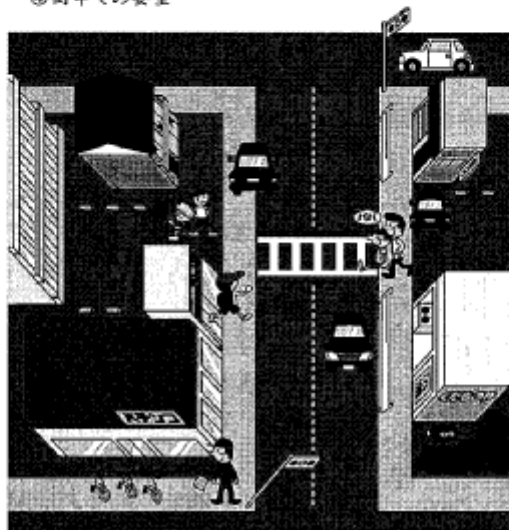
②留守番時



③公園での安全



④街中での安全



◎子どもの通学路歩行時の動作や視線の分析（阪田グループ）

児童（低学年6名、高学年6名）に通学路を実際に歩いてもらい、何に注意を向けているのか（視線および視野）を計測した。また、別の児童（低学年11名、高学年11名）に通学路の危険箇所をカメラで撮影してもらった。

視線・視野計測の結果、低学年において特に周囲環境への注意力が低いこと、雨の日は傘を差すことで視野が遮られていること、高学年であるほど軽率な行動（私有地への侵入や危険行動）が多いこと、大人と一緒にいる時と一人の時では行動パターンが異なることなどが抽出された。

児童が通学路で撮影した写真を分析した結果、低学年と高学年では危険だと認知する対象が異なり、低学年では障害物や田んぼ、路肩に対する危険認知が高く、高学年では交通や通路に対する危険認知が高いことが明らかにされた。このことから、低学年では物理的に視認できる具体物を危険だと考えがちであるが、高学年では危険が潜在する空間に対して危険を考えることができることが示唆された。



視線追尾装置  
(ナック社製 BMR9)



CCD 小型カメラ



## 2-3-2. 作成したe-learningシステムの概要

基礎研究結果を踏まえ、発達段階別（低学年、中学年、高学年）に教材化した。全ての学年に共通する教材と、発達段階に応じて特色を持たせた内容は以下のとおりである。

低学年：基礎的な知識の習得（110番、いかのおすしなど）

中学年：答えが一義的でない問題を扱う（防犯vs.道徳の視点）

高学年：地域性や気象条件等によって危険が変化することを理解する（自由記述課題）

### 教材一覧

教材提示形式	タイトル	対象クラス			備考
		低学年	中学年	高学年	
ブローケンピクチャー (防犯について)	警察(おまわりさん)に知らせる電話番号は？	○			
	消防(かじ)や救急(病気やけが)に知らせる電話番号は？				
	110番で呼ぶものは？				
	119番で呼ぶものは？				
	防犯標語「いかのおすし」の「いか」って何？				
	防犯標語「いかのおすし」の「の」って何？				
	防犯標語「いかのおすし」の「お」って何？				
	防犯標語「いかのおすし」の「す」って何？				
	防犯標語「いかのおすし」の「し」って何？				
コンセントレーション (絵合わせクイズ)	10枚のカードを使用	○			
ムービー (ルックアットピクチャー)	安全に生活するためには	○	○	○	*高学年は少し内容が違う
	子ども110番の家について知ろう	○	○	○	
	遅刻した時は	○	○	○	
	公園で遊ぶ時は	○			※中・高はムービークイズ
	玄関への入り方		○	○	
	デパートやショッピングセンターに行く時は	○	○	○	
	天候や季節による危険な場所の違い			○	
4択問題 (ルックアットピクチャー)	エレベーターに一人で乗った時は…	○	○	○	
	こわい人ってどんな顔？	○	○	○	
ムービークイズ (ルックアットピクチャー)	防犯ブザーの使い方	○	○		
	声かけの手口	○	○	○	
	外でトイレに行きたくになったら…	○	○	○	
	公園で遊ぶ時に注意すること		○	○	
	一人で外出する時は…	○	○	○	*高学年は少し問題の内容が違う
ディスカッション (ルックアットピクチャー)	(中学年のタイトル)困っている人がいたら… (高学年のタイトル)困っている人がいたら…(記述)		○	○	
	(中学年のタイトル)大人に声をかけられたら… (高学年のタイトル)大人に声をかけられたら…(記述)		○	○	*高学年は少し問題の内容が違う
	携帯電話と防犯ブザー(記述)			○	
	子ども110番の家(記述)			○	
	どっちの道を通る？(記述)			○	
	エレベーターに一人で乗っている時は…(記述)			○	

## 【教材インターフェイス】

### ◆ログイン画面



個人情報、各児童の学習履歴を扱うため、個別にIDとパスワードを設定した。

### ◆ログイン後の初期画面



◆教材イメージ（全学年共通「怖い人の顔」）

# 教材イメージ

**こわい人ってどんな顔？**

わるい人やこわい人ってどんな顔をしているのかな？

かんがえてみよう！





こわい人はどんな顔をしているのかな？

回答入力

マスクとサングラスをしている人(ひと)	おじさん
若(わかい)女性(じょせい)	若(わかい)男性(だんせい)



悪い人は、見た目ではわかりません。

☆閉じる



見た目では判断しないように注意しましょう。

☆閉じる

【児童の学習動機を維持するための工夫】

ペンギンのキャラクターを用い、1つの学習を終えるごとに衣装が変化する仕様とした。全ての学習を終えると、「博士」の装いになる。

※ペンギンはどの学校においても「かわいい」と好評であり、本教材を使用した授業における子どもたちの学習意欲の持続に大きく貢献した。

学習前



学習中



学習後



達成感を感じやすい

### 2-3-3. 実証実験の概要と成果

#### 【実証実験】

実証実験は、当プロジェクト実施者が所属する大阪教育大学附属池田小学校から開始した。その結果を踏まえて教材改修を行い、その後、全国の一般校（6校；東北地方1校、関東地区1校、中国地区2校、四国地区1校、九州地区1校）において実施した。

## 実証実験協力校

- 附属池田小学校(大阪府)
- 伊野南小学校(高知県)
- 三本木小学校(青森県)
- 佐伊津小学校(熊本県)
- 遥堪小学校(島根県)
- 金竜小学校(東京都)
- 矢野西小学校(広島県)



#### ◆授業の様子



## 実証実験の様子

大阪教育大学  
附属池田小学校  
(4年生)

1回目  
(e-learning学習)

2回目  
(ふりかえりの授業)



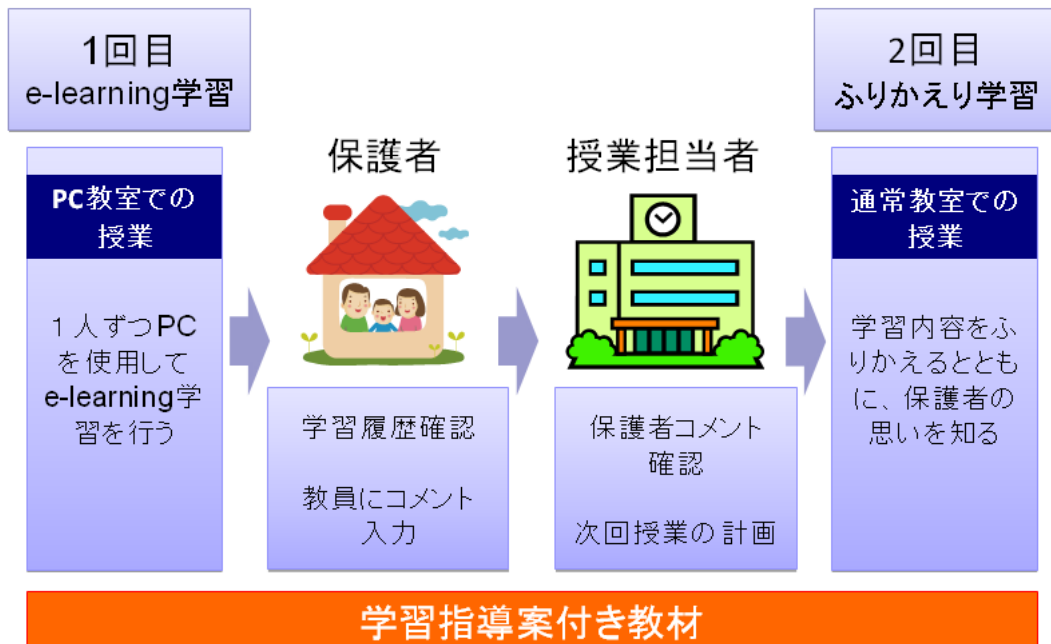
## 【実験の方法】

実験協力校には、下の「実証実験の流れ」に図示したように、1回の授業を45分として、2回以上の安全教育を実施するよう要請した。

1回目の授業では、児童が個々にパソコンを操作してe-learning学習を実施した。

その後、保護者に児童の学校での学習履歴を参照してもらい、学習に関するコメントを入力いただいた。教員には、1回目の授業における児童の様子や学習履歴、保護者からのコメント内容を踏まえて2回目の教室での授業計画を立案、実施いただいた。

## 実証実験の流れ(45分授業×2回)



## 【実証実験で得られた主な結果】

### ◎保護者の関与程度

保護者がe-learningシステムを参照して、本e-learningシステムに感想コメントを入力する割合には学校差が見られた。概して、教員が保護者に対して熱心に働きかけたり紙媒体の資料を併用するといった工夫を行うほど、保護者の参加率が高くなる傾向が認められた。

## 授業形態と保護者の参加率

学校	児童	保護者	低学年	中学年	高学年
A	e-learning	e-learning	35%	11%	40%
B			19%	19%	24%
C			19%	/	22%
D		ワークシート併用*	65%	50%	/
E			83%	50%	57%
F	集合学習	プリント配布	100%	/	97%
G			/	96%	94%

\* D校はワークシートにコメント記入、E校はe-learningにコメント記入

### ◎保護者の感想

教材内容やe-learningシステムによる安全教育の実施については、概して肯定的な意見が多く寄せられた。

一方、システムの操作性（ユーザビリティ）については、「ログインできなかった」「マニュアルを見ても操作方法がわかりにくかった」「面倒くさい」などの否定的な意見も見られた。

#### <保護者が記載したコメント例>

- ・ 家では聞かない内容の質問があり、改めて安全について考えるきっかけができてよかった。
- ・ 親が安全について「あたり前、知っていて当然」と思っていることを子どもが知らなかったり勘違いをしていることがあり、驚いた。
- ・ 「安全に気をつけて」だけでは不十分だと気づいた。
- ・ 親が学校での授業内容や子どもの理解度を自宅で見られるのは大変便利だと思う（好きな時間に見ることが出来るため）。
- ・ パソコンを使用して楽しかったようで、鮮明に子供の記憶に残ったようだ。
- ・ 以前あった子ども110番の家がなくなってしまうことを子どもから聞いて、はっとした。

## ◎児童の学習効果

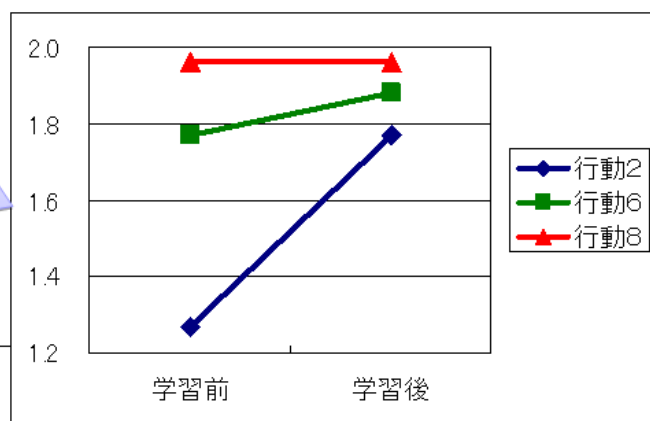
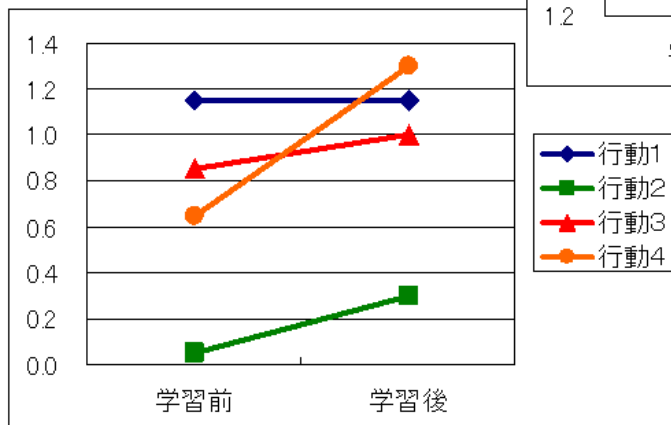
本実証実験以前より安全の学習を実施していた附属池田小学校においては、学習後に安全行動が増加することはなかったが、一般校の実験においては、概ね増加した。

安全行動に影響することが予測された認知要因（リスク認知、効力感、自尊感情、ソーシャルサポート認知、保護者に対する愛着など）は、部分的に安全行動との関連が確認されたが、認知要因そのものが2回の学習によって大きく変化することはなかった。以上の結果から、本研究開発教材は児童の安全行動の促進に有効であるが、安全行動に影響するとされる認知要因にまで働きかけるためには、継続的な学習を行うことでより実効性が高められる可能性のあることが示唆された。

## 児童の学習効果 \* ある学校の例

2年生

学習後に、安全行動の増加が確認された  
( $F(1, 25) = 8.16, p < .01$ )



4年生

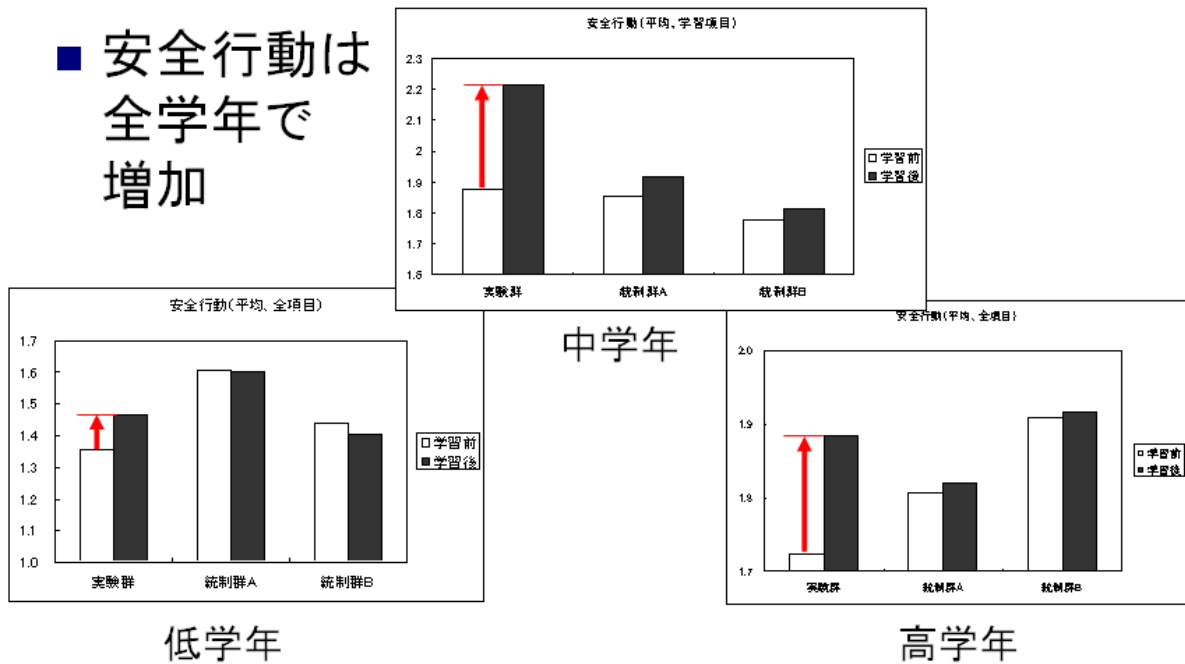
学習後に、安全行動の増加が確認された  
( $F(1, 19) = 4.51, p < .05$ )

学習後の安全行動の増加は、統制群を設けた実験を実施した学校においても確認された。すなわち、e-learningシステムによる安全教育を行ったクラスにおいてのみ、学習後に安全行動が増加（全学年で統計的有意）した。

# 児童の学習効果

\* 統制群を設けた  
ある学校の例

■ 安全行動は  
全学年で  
増加



## ◎教員（授業実施者）の感想

教材内容やe-learningシステムを用いた安全教育の取り組みについては、保護者と同様、評価が高かった。一方で、円滑な授業展開のための事前準備への負担感や、保護者と個別にコメントを交わすことへの不安感に関わる感想が寄せられた。



## 2-4. 研究開発実施体制

### 【平成19年度～平成20年度】

- ① e-learningシステム構築グループ：藤田大輔（大阪教育大学・教授）
  - プロジェクト全体統括、e-learningシステム環境の整備
- ② 子どもの防犯能力の概念構造分析グループ：刈間理介（東京大学・准教授）
  - 子どもの防犯に関する概念定義と学習内容の体系化
- ③ 防犯能力の測定指標の開発グループ：西岡伸紀（兵庫教育大学・教授）
  - 防犯能力測定指標の開発
- ④ 子どもの安全意識の構造解析グループ：木宮敬信（常葉学園大学・准教授）
  - 安全への「気づき」に関する調査の実施
- ⑤ 子どもの防犯反応の行動解析グループ：阪田真己子（同志社大学・准教授）
  - 子どもの動作・行動特性に関する検討

### 【平成21年度～平成22年度（前期）】

- ① e-learningシステム構築グループ：藤田大輔（大阪教育大学・教授）
  - プロジェクト全体統括、e-learningシステムの開発
- ② 子どもの安全意識の構造解析グループ：木宮敬信（常葉学園大学・准教授）
  - 児童の安全意識・行動調査、学校の安全教育実施状況調査、教材内容と教材提示方法の検討
- ③ 子どもの防犯反応の行動解析グループ：阪田真己子（同志社大学・准教授）
  - 通学路における子どもの行動の定量化

### 【平成22年度（後期）～平成24年度】

- ① 研究統括グループ：藤田大輔（大阪教育大学・教授）
  - プロジェクト全体統括、実証実験の実施、教材改修、学習指導案の整理、開発期間終了後の運用形態の決定

### 3. 研究開発実施の具体的内容

#### 3-1. 研究開発目標

本研究開発では、小学校児童に主体的な防犯意識を芽生えさせるための効果的な安全教育のe-learning教材を開発する。また、その使用効果についても検証した上で、期間内に内容の充実をはかり、最終的にWeb上で無償<sup>注)</sup>公開することを目標とする。

注)当初、教材を完全無償公開することを目標としていたが、実際の運用を行うためにはサーバーの維持費用や情報セキュリティを維持するための人的コスト面の問題が生じることが判明した。研究開発期間終了後においては、そのための費用の調達が難しいことから、システムの運用については外部企業に委託することとした。委託先の企業は、教育委員会等と契約を行うことにより、各学校では実質的に無償で教材を使用できる。なお、システムの運用は企業に委託するが、社会情勢を踏まえた教材内容の見直し等については、本研究開発に携わったプロジェクト実施者が引き続き行うこととする。具体的には、新たに大阪教育大学学校危機メンタルサポート内にプロジェクト事業を立ち上げて、定期的に会合を持って教材内容の見直しを行うとともに、教材を使用する学校に対して教材の理念を理解した上で活用していただくための研修を行う。

教材の開発にあたっては、過去の安全教育の問題点を踏まえて実施した。具体的には、以下の視点のもと作成した。

#### 従来の安全教育＝危険発見型の安全教育

- ・ 従来行われてきたような「〇〇は危険だ」、「〇〇に気をつけなさい」というような危険発見型の安全教育では、大人や地域に対する過剰な不信感や恐怖感を形成してしまう可能性がある
  - ・ 事件や事故に巻き込まれてしまった子どもに自己責任を過度に強調した犠牲者非難を生じさせる危険性がある
- ⇒子どもの心身の発達に良い影響を及ぼさない  
⇒事故や事件が表面化しにくくなる、などの問題がある

#### 本研究開発の目標＝安全への共感と協働に基づいた安全教育

- ・ 安全推進のための「自助」能力の育成を基盤としつつも、身近な大人や地域の人々から提供されるソーシャルサポートを実感できる
  - ・ 危険だけでなく、安全にも気づけるようになる
  - ・ 「自分から取り組んでいこう」という主体的な安全意識が持てるようになる
- ⇒ソーシャルサポート認知、安全直観力、安全効力感の心理要因に働きかける

現状においては、ソーシャルサポート認知、安全直観力、安全効力感などの心理要因が児童の安全行動と関係することを示す科学的根拠は十分ではない。従って、本研究開発では、①安全行動とソーシャルサポート認知、安全直観力、安全効力感に正の相関が確認されるかどうかを検討する。加えて、本研究開発において作成するe-learning教材の使用効果を検討するため、②学習後に安全行動やソーシャルサポート認知、安全直観力、安全効力感が高まるかどうかを検討する。

本研究開発の目標と、「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域の目標の対応は以下の通りである。

「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域の目標	本研究開発（藤田プロジェクト）の目標
①子どもの安全の問題解決に取り組む人と研究者が協同するための開かれたネットワークを構築する	<p>本研究開発において作成する e-learning システムを活用することにより、学校教員、保護者、研究者（プロジェクト実施者）が協同して子どもの防犯能力の向上に努めることができる。</p> <p>本研究開発終了後も、大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター内にプロジェクト事業（安全教育研究会（仮称））を立ち上げて、プロジェクト実施者が引き続き犯罪情勢の変化に応じた教材内容の見直しを行う。また、本研究開発終了後に本教材を活用したいという学校に対して、教材開発理念を正しく理解した上で利用いただくための事前研修制度を新設する（研修には教材を活用する学校から少なくとも1名以上に参加していただき、修了者に対して「安全教育普及員（仮称）」を認定する予定である。）</p>
②防犯対策の基盤となる科学的知見および手法を創出する	<p>&lt;基礎研究&gt;</p> <p>e-learning 教材を作成するための基礎研究として、子供の防犯能力の概念構造の定義や学習内容の体系化を行うとともに、子どもの認知や行動のデータを収集する。特に、街中のイラストから潜在的な危険や安全を見つけ出すという子どもの素朴な認知を検討した研究や、子どもが通学路を実際に歩行して何に注意を向けているのかを検討する研究は、国内はもとより諸外国においてもほとんど例がなく、学術的な価値が高いものであると考えられる。</p> <p>&lt;実証実験&gt;</p> <p>e-learning による安全教育の学習効果を評価するため、学習の前後の児童の安全行動や安全に関する認知を測定する。また、「安全への共感と協働に基づいた安全教育」という本研究開発の理念の正しさを検討するために、ソーシャルサポート認知や安全直観力、安全効力感などの心理要因と安全行動の関係を検討する。</p>
③科学的知見及び手法を活用して地域の実情に合わせた効果的かつ持続的な防犯対策に関する政策提言や実証成果を創出する	<p>地域性や学校規模を踏まえた教材の活用法を検討するため、全国7地域から大小様々な規模の小学校に実証実験に参加していただき、教材の活用法や学習効果について検討する。</p>

なお、「犯罪からの子どもの安全」研究開発領域の募集要項には、本研究開発領域の目標を推進するにあたって、「子どもを犯罪から守る取り組みを強化することが他の重要な価値を損なうことにならないよう留意する必要がある、本領域においては、信頼できる人間関係の下、子どもの健全に育成し、安心して生活が営める地域社会作りに資する成果の創出を目指して研究開発を推進する。（中略）」と記載されている。このような視点は、本研究開発領域が目標とする「安全への共感と協働に基づいた安全教育」と理念を同じくするものであると考えられる。

### 3-2. 実施項目

#### <第一段階> 基礎研究段階

- ・ 子どもの安全学習に関する先進的な事例や研究知見を収集する
- ・ 子どもの学習に有効なe-learningシステムの活用法を検討する
- ・ 子どもに求められる防犯能力の概念定義を行う
- ・ 子どもの防犯能力を測定するための指標を開発する
- ・ 子どもの安全への気づきに関する調査を実施する
- ・ 子どもの通学路歩行時の動作や視線を分析する

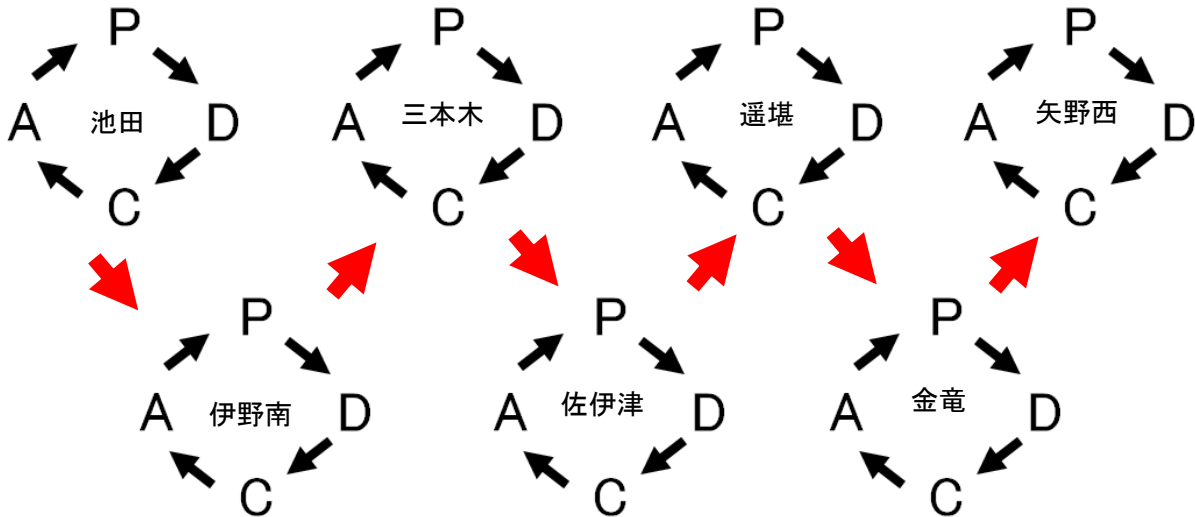
#### <第二段階> 教材開発段階

- ・ 基礎研究の知見をまとめて、e-learning教材開発を行う
- ・ 教材使用効果を評価するための質問紙を開発する
- ・ 実験協力校を決定する

#### <第三段階> 実証実験、教材完成段階

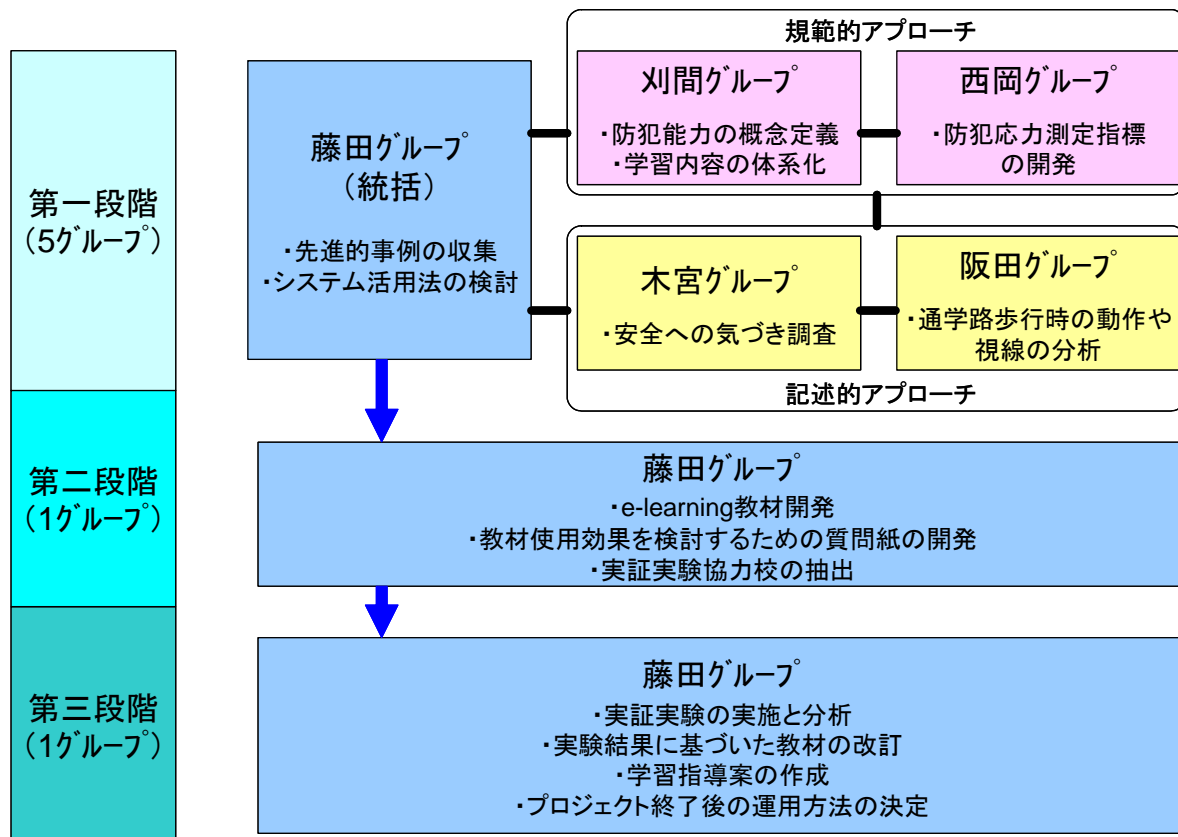
- ・ 教材の使用効果を検討するための実証実験を実施する
- ・ 実証実験結果に基づいて教材を修正し、完成する
- ・ 本研究開発教材の理念を生かした安全教育を実施するための学習指導案を作成する
- ・ プロジェクト終了後の運用形態を確定する

※ 第三段階においては、P（実証実験準備、実験協力校における事前説明会の開催）→D（実証実験実施）→C（教育効果測定、子ども・保護者・教員の反応の確認、実証実験報告会の開催）→A（教材改訂、実験・授業方法の見直し）のPDCAのサイクルを、実証実験毎に（7回）繰り返す。



### 3-3. 研究開発結果・成果

#### 3-3-1. 基礎研究結果とその成果



第一段階（基礎研究）では、小学校児童にどのような安全教育教材を提示することが有効であるかを検討するために、2つのアプローチ（規範的、記述的）を用いた。

規範的アプローチ（刈間・西岡グループ実施）では、安全教育の専門家の視点から、「どのようなことを児童に教えるべきか」を検討した。具体的には、過去の研究知見を参考に小学校児童に期待される防犯能力の概念定義を行った後、各概念と学習内容の対応づけを行った。なお、小学校の6年間は認知発達に大きな変化が生じる時期であることから、学習内容は発達段階別（低学年・中学年・高学年別）に整理した。また、子どもの防犯能力を測定するための方法について検討を行った。具体的には、過去の研究を参照して、小学校児童の防犯能力を測定するために適切な方法を検討し、防犯能力の概念定義および学習内容を踏まえた評価指標を開発した。

記述的アプローチ（木宮・阪田グループ実施）では、「子どもは実際に何に注意を向け、どのように行動しているのか」という子どもの視点からの認知や行動について検討した。具体的には、映像やイラストの中の潜在的な危険についてどのように考えるのかを回答したり、通学路を実際に歩いてもらい、何に注意を向けているのかや、何を危険だと思っているのかをカメラで撮影してもらう方法を用いた。その結果、何を危険だと認識するかには学年差があり、低学年では物理的に視認できる危険物に注意が向きやすいが、中学年以上では安全にも気づきやすくなったり、潜在的な危険にも気づくことができることが示唆された。

以上の内容については、「2-3.主な結果・成果」に記載したとおりである。

加えて、藤田（統括）グループが実施した基礎研究としては、以下のものがある。

- ・ 小学校 3 年生児童の対人認知の特徴を分析した研究（豊沢・藤田, 2012）
    - ・ 他者（若い女性）から「お腹が痛いから荷物を持ってほしい」という援助要請を受ける場面を想定して、どのような時に助け、どのような時に断るのかを書いてもらう（防犯と道徳の視点が拮抗し、正解が一つに定まらない問題への児童の反応を確認する）
    - ・ 結果と考察
      - ・ 助けるのは、家族や知人からの援助要請である場合のほか、相手の不調が表出している場合や、妊婦やお年寄りの場合であった。
      - ・ 一方、助けないのは、怖い人のイメージ（包丁やサングラス・黒い服などの装い）に適合している場合であった。
- ⇒外見を重視したステレオタイプ的な判断が優勢（悪い人 vs. 要援助者ステレオタイプ）
- ・ 対人判断を行う際にステレオタイプを使用すること自体は大人と共通することであるが、妥当性に乏しい子ども特有の判断基準も見られた（ニヤニヤしている、包丁を持っている、どんな感じで痛いか聞いて 2 秒以内で答えられなかったら嘘つき、など）
- このような判断の背景
- ⇒子ども向けアニメ番組の影響
- ⇒生活環境（妊婦やお年寄りが身近に多い）の影響
- ⇒発達の初期に見られる自己中心性の影響 など
- ・ 以上の知見から、「悪い人は見た目では分からない」ことを教育内容で扱うことが有効
  - ・ 児童自らが自分の考え方の問題点に気づくことのできるような授業構成が望ましい
- ⇒大人が正解を教えるのではなく、児童同士のディスカッションを通して危険や安全への気づきを深めていくことが有用である可能性

次に、主に第二段階（教材開発）、第三段階（実証実験、教材完成）の内容について報告する。

### 3-3-2. 教材とその使用状況

教材一覧		対象クラス			使用数			備考
		低学年	中学年	高学年	低学年	中学年	高学年	
クイズ形式	警察(おまわりさん)に知らせる電話番号は？	○			3			
	消防(かじ)や救急(病気やけが)に知らせる電話番号は？	○			3			
	110番で呼ぶものは？	○			3			
	119番で呼ぶものは？	○			3			
	防犯標語「いかのおすし」の「いか」って何？	○			3			
	防犯標語「いかのおすし」の「の」って何？	○			3			
	防犯標語「いかのおすし」の「お」って何？	○			3			
	防犯標語「いかのおすし」の「す」って何？	○			3			
	防犯標語「いかのおすし」の「し」って何？	○			3			
コンセントレーション (総合させクイズ)	10枚のカードを使用	○			0			
ムービー (ルックアットピクチャー)	安全に生活するためには	○	○	○	1	0	2	*高学年は少し内容が違う
	こども110番の家について知ろう	○	○	○	1	0	1	
	遅刻した時は	○	○	○	0	1	1	
	公園で遊ぶ時は	○			1			※中・高はムービークイズ
	玄関への入り方		○	○		0	1	
	デパートやショッピングセンターに行く時は	○	○	○	0	0	1	
	天候や季節による危険な場所の違い			○			3	
4択問題 (ルックアットピクチャー)	エレベーターに一人で乗った時は…	○	○	○	1	0	1	
	こわい人ってどんな顔？	○	○	○	3	4	2	
ムービークイズ (ルックアットピクチャー)	防犯ブザーの使い方	○	○		0	2		
	声かけの手口	○	○	○	1	2	0	
	外でトイレに行きたくなったら…	○	○	○	0	1	0	
	公園で遊ぶ時に注意すること		○	○		1	0	
	一人で外出する時は…	○	○	○	3	1	1	*高学年は少し問題の内容が違う
ディスカッション (ルックアットピクチャー)	(中学年のタイトル)困っている人がいたら… (高学年のタイトル)困っている人がいたら…(記述)		○	○		1	2	学年表記あり
	(中学年のタイトル)大人に声をかけられたら… (高学年のタイトル)大人に声をかけられたら…(記述)		○	○		1	1	学年表記あり *高学年は少し問題の内容が違う
	携帯電話と防犯ブザー(記述)			○			0	学年表記あり
	子ども110番の家(記述)			○			1	学年表記あり
	どっちの道を通る？(記述)			○			0	学年表記あり
	エレベーターに一人で乗っている時は…(記述)			○			3	

※数字は実証実験において当該教材を使用した学校の数を示す。

全学年を通して最も多く活用された教材は「怖い人の顔」であった。この教材は、安全教育で正解を一義的に定義できない問いを扱った代表的なものであり、どの学年においても重要性が認識されると共に、教材の提示時間が短いことから授業で活用しやすかったようである。

加えて、低学年では基礎的な知識を習得するための教材（ブロークンピクチャー）、高学年では同じ場所でも危険が変化することを学習するための教材（天候や季節による危険な場所の違い）が多く活用されていた。

### 3-3-3. 児童アンケートの概要

大人の意識や行動を評価する上で最も多く使用されているのは質問紙（アンケート）調査であろう。しかし児童の意識や行動を評価する上でアンケートを使用することが妥当であるかどうかは評価が分かれるところである。例えば櫻井（2007）は、質問紙調査において妥当性の高い測定を得るためには、小学校5年生以上を対象とすることが望ましいとしている。その理由としては、質問紙の内容を理解したり、質問紙の実施に必要な30分程度以上の集中力を持続したりすることができるのが小学校3年生くらいからであること、そして自分を客観視できるようになるのが小学校5年生くらいであると述べられている。

また、西岡グループの調査結果によると、過去の研究で幼児や児童の防犯能力を測定する方法として多く採用されていたのは、シミュレーション場面やロールプレイングにおける行動測定やインタビューであった。しかしながら、シミュレーション場面で児童を危険にさらすことには倫理的な問題があり、また安全教育はクラス単位で実施されることが多いことを考慮すると、教育効果を評価する上でクラスの児童全員に個別にインタビュー調査をすることは現実的ではないと思われた。

そこで本研究開発においては、質問紙による評価を行うが、質問項目数や質問内容、回答選択肢の表現の仕方等については、実験協力校の教員から実験の都度助言をいただき、内容を検討した上で実施することとした。

評価の対象は、児童の安全行動（予防行動）、安全に関する知識、安全行動に関与することが予測される認知や感情であった。安全行動については、教材化した全ての安全行動を対象とすると質問項目数が多くなるため、各学校の実験時に授業で取り扱った内容を中心に尋ねた。安全に関する知識については、特に低学年において、知識学習の内容を授業で取り扱った場合に測定した。認知や感情については、心理学領域におけるリスク研究、対人関係に関する研究等から必要な項目を抽出した。また e-learning による安全学習の授業に対する評価も行った。

#### 引用文献

櫻井茂男（2007） 子どものこころを測定するために 櫻井茂男・松井豊（編） 心理測定尺度集 IV--子どもの発達を支える<対人関係・適応>- （pp. 399-403）.

#### 〔実証実験協力者数（児童）〕

	低学年		中学年		高学年	
附属池田小学校（大阪）	2年生：37名		4年生：38名		5年生：39名	
伊野南小学校（高知）	2年生：31名		4年生：21名		—	
三本木小学校（青森）	2年生：32名		—		5年生：36名	
佐伊津小学校（熊本）	2年生：31名		—		6年生：29名	
遥堪小学校（島根）	—		4年生：24名		6年生：17名	
金竜小学校（東京）	1年生		4年生		5年生	
	実験群 30名	統制群 29名	実験群 28名	統制群 28名	実験群 28名	統制群 27名
矢野西小学校（広島）	2年生		4年生		5年生	
	実験群 26名	統制群 47名	実験群 27名	統制群 51名	実験群 29名	統制群 57名

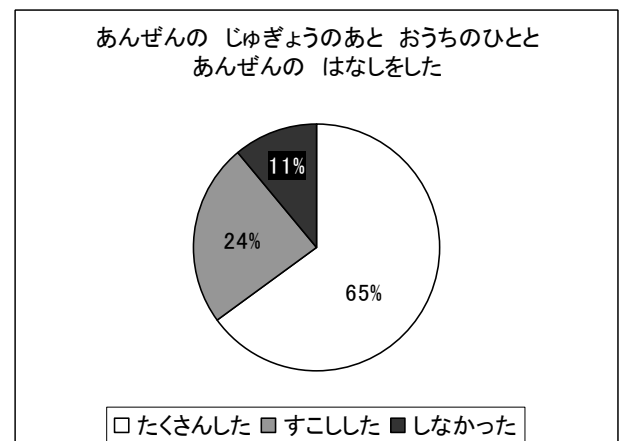
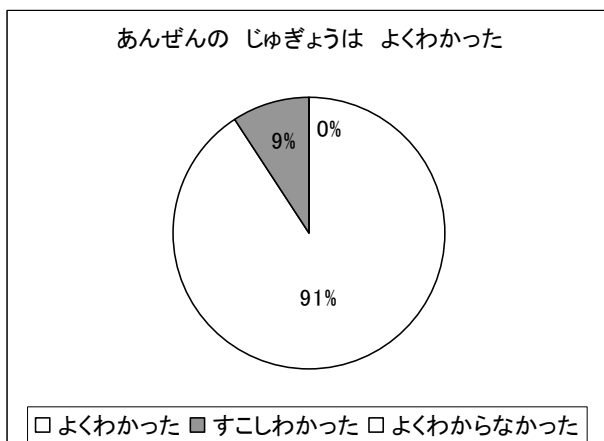
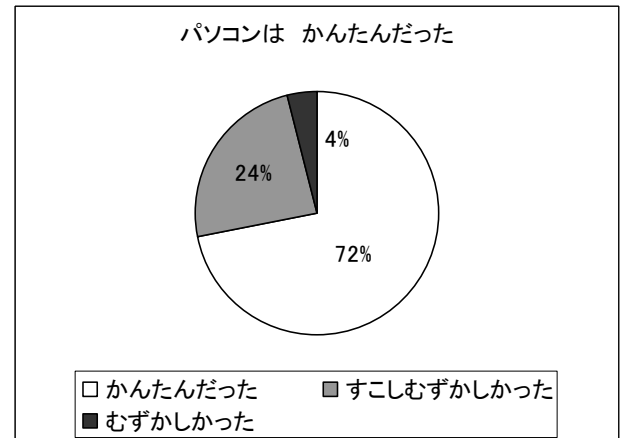
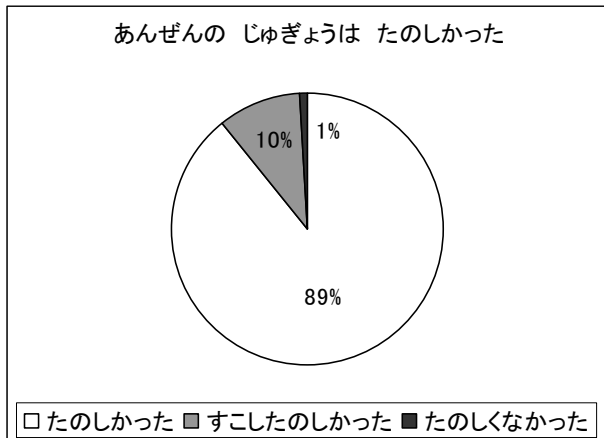


### 3-3-3-1. 低学年アンケートの分析結果

低学年では、質問内容に対する理解や集中力の持続の問題を考慮して、できる限り質問項目を絞り込んだ。本報告書においては、主な結果について報告する（多くの学校で共通して使用された項目を対象とする）。

実証実験における全ての結果については、実証実験協力校ごとに作成した「実証実験報告書」を参照されたい。

〔授業評価〕



安全の授業は楽しいという意見が多く、授業の理解度も高かった。ただし、パソコンの操作面では、多くは「簡単だった」と答えているものの、「少し難しかった」「難しかった」という意見もあった。授業後の家庭の会話は、半数以上が「たくさんした」と回答したが、「しなかった」家庭も 11%見受けられた。

[安全に関する知識] 知識問題を扱い、かつ統制群を設けた1校を対象

- ❖ 問題1 (けいさつに しらせる でんわばんごうは?) (正解: 110番)

	実験群	統制群
正解	29名	17名
不正解または無回答	1名	12名

$\chi^2(1) = 12.43, p < .001$  \*正解率の高さ: 実験群 > 統制群

- ❖ 問題2 (しょうぼうに しらせる でんわばんごうは?) (正解: 119番)

	実験群	統制群
正解	28名	11名
不正解または無回答	2名	18名

$\chi^2(1) = 23.60, p < .001$  \*正解率の高さ: 実験群 > 統制群

- ❖ 問題3 (110ばんでよぶのはなに?) (正解: けいさつ)

	実験群	統制群
正解	29名	11名
不正解または無回答	1名	18名

$\chi^2(1) = 23.30, p < .001$  \*正解率の高さ: 実験群 > 統制群

- ❖ 問題4 (119ばんでよぶのはなに?) (正解: しょうぶしゃ、きゅうきゅうしゃ)

	実験群	統制群
正解	29名	11名
不正解または無回答	1名	18名

$\chi^2(1) = 23.30, p < .001$  \*正解率の高さ: 実験群 > 統制群

- ❖ 問題5 (いかのおすしの「いか」とは?) (正解: ついてい**か**ない)

	実験群	統制群
正解	30名	21名
不正解または無回答	0名	8名

$\chi^2(1) = 9.57, p < .01$  \*正解率の高さ: 実験群 > 統制群

- ❖ 問題6 (いかのおすしの「の」とは?) (正解: 車**に**のらない)

	実験群	統制群
正解	30名	21名
不正解または無回答	0名	8名

$\chi^2(1) = 9.57, p < .01$  \*正解率の高さ: 実験群 > 統制群

- ❖ 問題 7 (いかのおすしの「お」とは?) (正解: おおごえをだす)

	実験群	統制群
正解	27 名	11 名
不正解または無回答	3 名	18 名

$\chi^2(1) = 17.44, p < .01$  \*正解率の高さ: 実験群 > 統制群

- ❖ 問題 8 (いかのおすしの「す」とは?) (正解: すぐにげる)

	実験群	統制群
正解	20 名	12 名
不正解または無回答	10 名	17 名

$\chi^2(1) = 3.80, p < .10$  \*正解率の高さ: 実験群 > 統制群

- ❖ 問題 9 (いかのおすしの「し」とは?) (正解: しらせる)

	実験群	統制群
正解	21 名	8 名
不正解または無回答	9 名	21 名

$\chi^2(1) = 10.61, p < .01$  \*正解率の高さ: 実験群 > 統制群

- ❖ 問題 10 (ひとりで エレベーターに のるときは どこにたちますか?) (正解: ボタンのまえ)

	実験群	統制群
正解	24 名	7 名
不正解または無回答	6 名	22 名

$\chi^2(1) = 18.45, p < .01$  \*正解率の高さ: 実験群 > 統制群

全ての設問において、実験群の方が統制群よりも正解率が高かった。安全に関する知識の獲得については、学習効果は顕著であった。

[安全行動、安全に関する認知と感情]

設問（安全行動）

行動 01	ガードレールのあるみちではガードレールのうちがわをあるく
行動 02	あそびに行くときはおうちの人にどこに行くのかをつたえる
行動 03	あそびに行くときはおうちの人にだれとあそぶのかをつたえる
行動 04	あそびに行くときはおうちのひとになんじにかえってくるのかをつたえる
行動 05	こども 110 ばんのいえがどこにあるかわかる
行動 06	くらくなるまえにおうちにかえる
行動 07	そとでトイレにいきたくなったらおうちの人やともだちといっしょに行く
行動 08	ひとりででかけるときはぼうはんブザーやホイッスルをもっていく
行動 09	ぼうはんブザーやホイッスルをならすれんしゅうをする
行動 10	きんじょの人にあいさつをする

設問（認知・感情）

認知 01	安全直観力（安全）	きんじょの人があいさつしてくれるとうれしい
認知 02	安全直観力（安全）	がっこうに行くときにきんじょの人がどうろでみまもってくれとあんしんだ
認知 03	保護者との会話	こわいことがあったらおうちの人にはなす
認知 04	保護者との会話	がっこうのでできごとをおうちの人にはなす
認知 05	安全直観力（危険）	こうえんのトイレに行くのはいやだ
認知 06	安全直観力（危険）	くらいみちをあるくのはこわい
認知 07	自分を大切に思う気持ち	わたしはじぶんをたいせつにしたい
認知 08	ソーシャルサポート認知（保護者）	おうち的人是わたしがこまったときにたすけてくれる
認知 09	ソーシャルサポート認知（保護者）	おうち的人是わたしをまもってくれる
認知 10	ソーシャルサポート認知（近所の人）	こわいことがあったときには「こども 110 ばんのいえ」にいけばたすけてもらえる
認知 11	ソーシャルサポート認知（近所の人）	ひとりでそとにいるときにこまったことがおきたらちかくのおとながたすけてくれる

①学習前後の変化 (t 検定)

変数別集計結果

項目	信頼性係数		評定値 (3 件法, 0-2)		検定結果
	学習前	学習後	学習前	学習後	
行動	.68	.76	1.54 (.38)	1.67 (.38)	増加 ( $t(178) = 3.18, p < .001$ )
安全直観力 (安全)	.52	.60	1.83 (.36)	1.82 (.38)	変化無し
安全直観力 (危険)	.67	.55	1.38 (.64)	1.44 (.67)	変化無し
自分を大切に思う 気持ち	-	-	1.91 (.32)	1.89 (.35)	変化無し
ソーシャルサポ ート認知 (保護者)	.77	.79	1.77 (.47)	1.87 (.33)	増加 ( $t(178) = 3.19, p < .01$ )
ソーシャルサポ ート認知 (近所の人)	.69	.69	1.57 (.54)	1.66 (.49)	増加 ( $t(177) = 2.54, p < .05$ )
保護者との会話	.61	.63	1.76 (.44)	1.81 (.38)	増加 ( $t(178) = 1.96, p < .10$ )

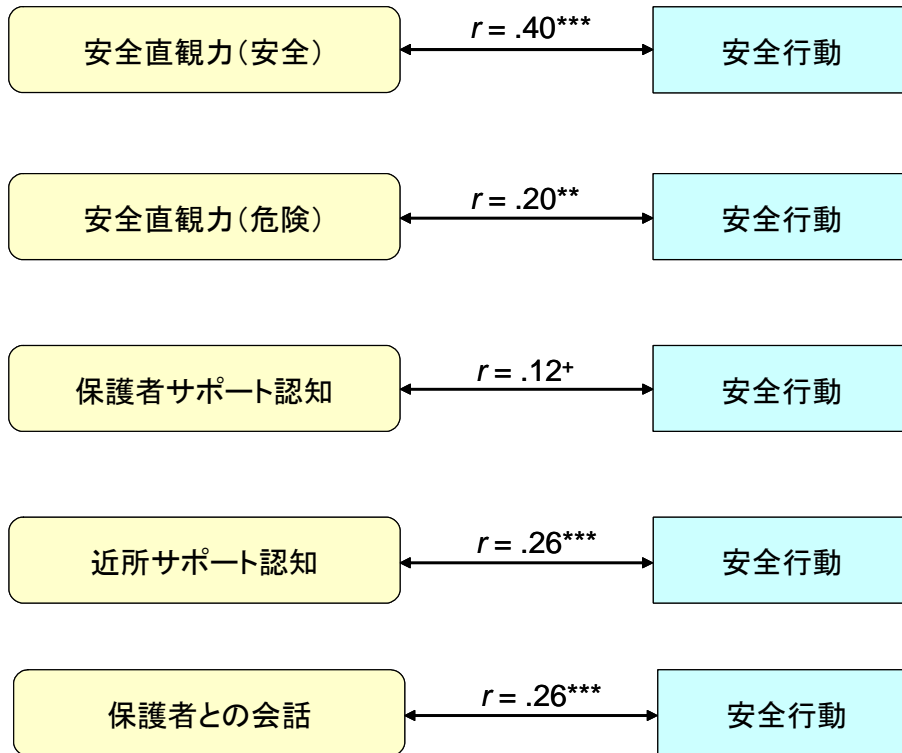
ただし、低学年においては、上記の通り変数別の信頼性係数が低いものがあつたため、項目別にも分析を行った。

変数	項目	評定値 (3 件法, 0-2)		検定結果
		学習前	学習後	
行動	行動 01	1.76 (.53)	1.88 (.36)	増加 ( $t(146) = 3.18, p < .01$ )
	行動 02	1.74 (.48)	1.79 (.50)	変化無し
	行動 03	1.75 (.52)	1.80 (.52)	変化無し
	行動 04	1.62 (.68)	1.67 (.62)	変化無し
	行動 05	.75 (.66)	1.15 (.70)	増加 ( $t(83) = 4.87, p < .001$ )
	行動 06	1.78 (.47)	1.90 (.38)	増加 ( $t(78) = 2.00, p < .05$ )
	行動 07	1.32 (.80)	1.45 (.82)	変化無し
	行動 08	.94 (.86)	1.07 (.86)	変化無し
	行動 09	.72 (.73)	.86 (.79)	変化無し
	行動 10	1.61 (.58)	1.71 (.54)	増加 ( $t(107) = 2.34, p < .05$ )
安全直観力 (安全)	認知 01	1.84 (.42)	1.80 (.45)	変化無し
	認知 02	1.83 (.46)	1.84 (.44)	変化無し
安全直観力 (危険)	認知 05	1.31 (.77)	1.44 (.76)	増加 ( $t(177) = 2.42, p < .05$ )
	認知 06	1.47 (.79)	1.48 (.78)	変化無し
自分を大切に思う 気持ち	認知 07	1.91 (.32)	1.90 (.35)	変化無し
ソーシャルサポ ート認知 (保護者)	認知 08	1.69 (.61)	1.85 (.39)	増加 ( $t(142) = 3.41, p < .01$ )
	認知 09	1.81 (.47)	1.88 (.35)	増加 ( $t(178) = 1.96, p < .10$ )
ソーシャルサポ ート認知 (近所の人)	認知 10	1.69 (.58)	1.75 (.52)	変化無し
	認知 11	1.46 (.66)	1.57 (.64)	増加 ( $t(177) = 2.25, p < .05$ )
保護者との会話	認知 03	1.84 (.47)	1.87 (.43)	変化無し
	認知 04	1.67 (.56)	1.77 (.47)	増加 ( $t(178) = 2.31, p < .05$ )

※ 値は平均値 (標準偏差) を示す。

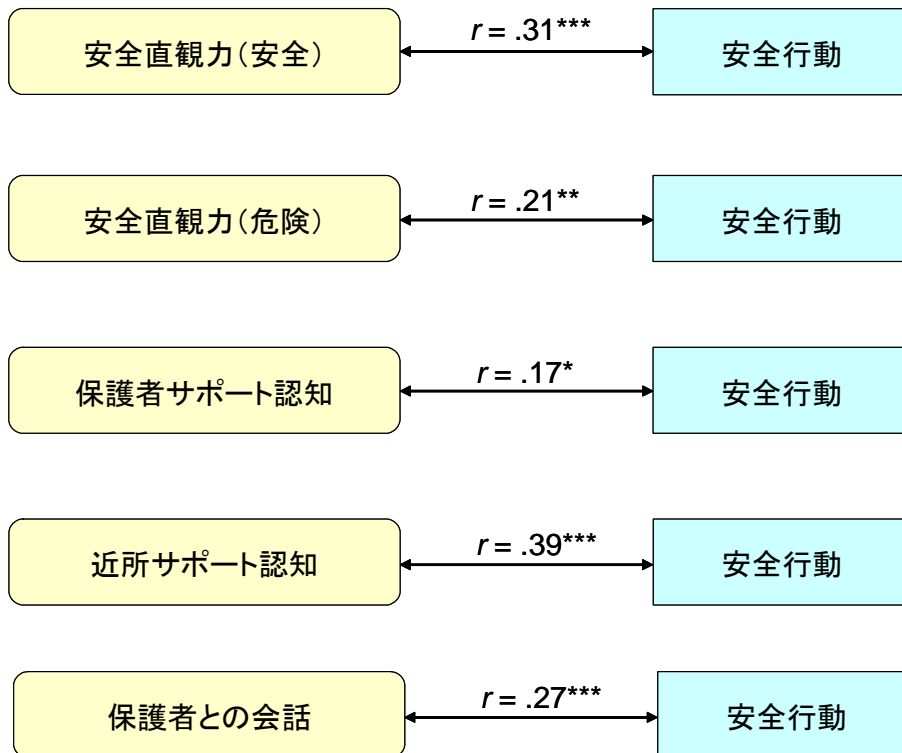
②安全行動と心理変数の関係（相関分析）

[学習前]



\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$  (以下同様)

[学習後]



## 考察

上記の2つの目的について考察を行う。

目的①安全行動とソーシャルサポート認知、安全直観力、安全効力感に正の相関が確認されるかどうかを検討する

低学年の分析結果からは、学習の前後のいずれにおいても、安全直観力（安全、危険）、保護者との会話、ソーシャルサポート認知（保護者、近所の人）がいずれも安全行動と正の相関を持つことが確認された。このことから、安全への共感と協働に基づいた安全教育が有効であるとの本研究開発の理念は支持されたと考えられる。

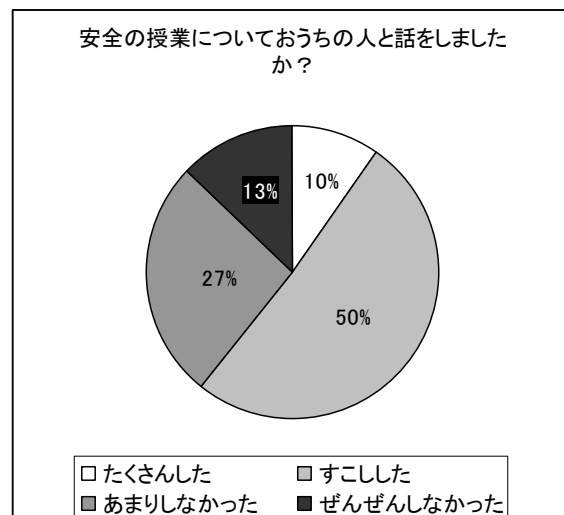
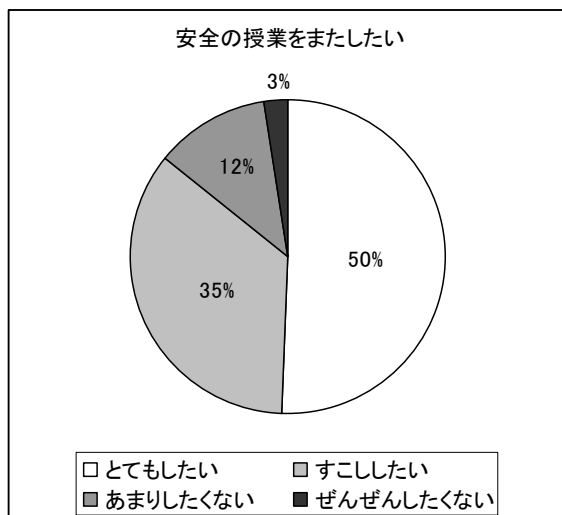
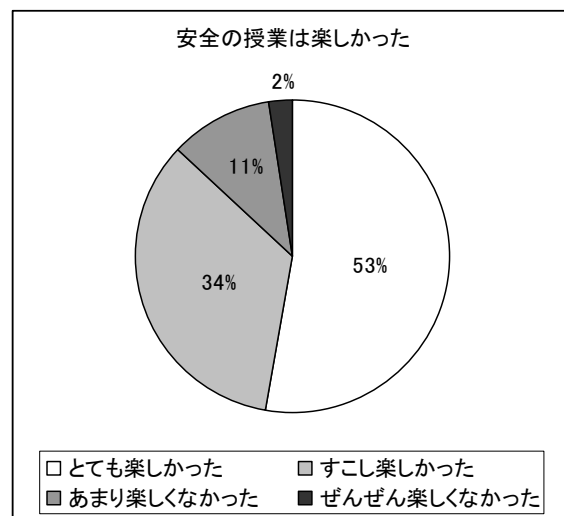
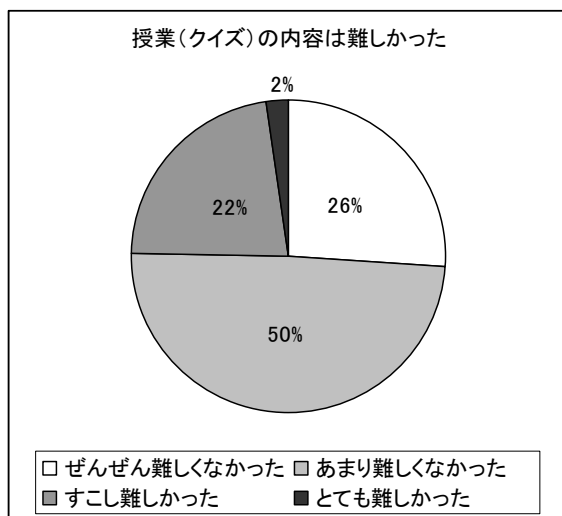
目的②本研究開発によって開発した e-learning 教材を用いた学習によって、安全行動、安全に関する知識、安全に関する認知（ソーシャルサポート認知、安全直観力、安全効力感）が高まるかどうかを検討する

低学年の分析結果からは、学習後に安全行動、安全に関する知識、ソーシャルサポート認知がいずれも高くなることが確認された。これらの結果は期待通りのものであり、本教材が児童の安全行動、安全知識、安全に関する意識の増加に寄与することを示す結果であると考えられる。

一方、安全直観力と自分を大切に思う気持ちについては変化がなかった。自分を大切に思う気持ちについては、学習以前から得点が高く、天井効果が生じた可能性が考えられる。安全直観力については、項目別に見た場合には期待した変化を示したものもあるが、全体としての効果は認められなかった。

### 3-3-3-2. 中学年アンケートの分析結果

[授業評価]



授業の楽しさや再学習の動機は高かったと言える。授業の内容の難しさについても、個人差はあるが概ね「難しくない」との評価であった。家庭での会話については、評価が分かれた。以上の傾向は、低学年と類似したものだと考えられる。



〔安全行動、安全に関する認知と感情〕

中学年においても、低学年と同様に、2つの目的について検討した。

(①安全行動とソーシャルサポート認知、安全直観力、安全効力感に正の相関が確認されるかどうかを検討する)

(②本研究開発によって開発した e-learning 教材を用いた学習によって、安全行動やソーシャルサポート認知、安全直観力、安全効力感が高まるかどうかを検討する)

※ なお、以下に報告する中学年・高学年の分析結果は、アンケート項目に重複の多かった一般校（3校）のデータに基づいている

（安全行動 18 項目、安全直観力 6 項目、保護者のサポート認知 5 項目、近所の人のサポート認知 3 項目、安全効力感 3 項目の平均値を用いて得点を算出）。

設問（安全行動）※中学年、高学年共通

行動 01	学校の帰りに寄り道をする（逆転項目）
行動 02	近所の人にあいさつをする
行動 03	知らない車がエンジンをかけて止まっていたら近づかない
行動 04	駐車場で遊ぶ（逆転項目）
行動 05	ガードレールのある道では、ガードレールの内側を歩く
行動 06	遊びに行く時は、おうちの人に、どこに行くのかを伝える
行動 07	遊びに行く時は、おうちの人に、誰と遊ぶのかを伝える
行動 08	遊びに行く時は、おうちの人に、何時に帰るのかを伝える
行動 09	こども 110 番の家がどこにあるかわかる
行動 10	一人で外にいる時に、こわいことや困ったことがあったら、こども 110 番の家に行く
行動 11	暗くなる前におうちに帰る
行動 12	急いでいる時は、暗くても近い道を通って帰る（逆転項目）
行動 13	デパートやショッピングセンターでトイレに行きたくなったら、一人でトイレに行く（逆転項目）
行動 14	公園のトイレに行く時は、おうちの人や友達と一緒にいく
行動 15	一人で外にいる時にトイレに行きたくなったら、近くのコンビニやこども 110 番の家に行く
行動 16	一人で出かける時は、防犯ブザーやホイッスルを持って行く
行動 17	防犯ブザーやホイッスルは、ランドセルやかばんの外に出している
行動 18	防犯ブザーやホイッスルを鳴らす練習をしている

設問（安全直観力）※中学年、高学年共通

直観 01	一人で公園のトイレには行きたくない
直観 02	らくがきやゴミの多い場所は、危険な感じがする
直観 03	暗い道を歩くのは、こわくない（逆転項目）
直観 04	たくさん人がいる公園では、安心して遊べる
直観 05	学校に行く時間に、近所の人が道路で見守っていると、安心だ
直観 06	近所の人があいさつしてくれると、うれしい

設問（保護者のサポート認知）※中学年、高学年共通

保護者 01	おうちの人は、私の話をよくきいてくれる
保護者 02	おうちの人は、私のことを信頼してくれる
保護者 03	私は、おうちの人を信頼している
保護者 04	おうちの人は、私を守ってくれる
保護者 05	おうちの人は、私がこまった時に助けてくれる

設問（近所の人をサポート認知）※中学年、高学年共通

近所 01	ひとりで外にいる時に、困ったことがおきたら、近くの大人が助けてくれる
近所 02	こわいことがあった時は「こども110ばんの家」に行けば、助けてもらえる
近所 03	近所の人には、親切で、信頼できる人たちだ

設問（安全効力感）※中学年、高学年共通

安全効力 01	自分の安全は、自分で守ることができる
安全効力 02	こわいことがあったら、自分から、近くの大人に助けを求めることができる
安全効力 03	私は、安全に行動できる人だ

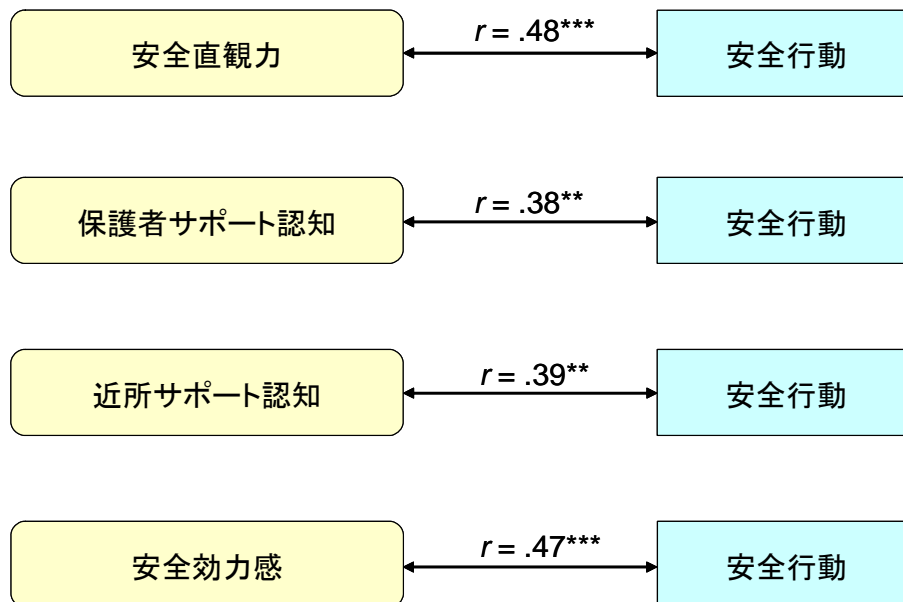
①学習前後の変化 (t 検定)

心理変数	評定値 (4 件法, 0-3)		検定結果
	学習前	学習後	
安全行動	1.85 (.38)	1.91 (.39)	増加 ( $t(72) = 1.75, p < .10$ )
安全直観力	2.08 (.50)	2.09 (.56)	変化無し
保護者のサポート認知	2.49 (.59)	2.38 (.62)	低下 ( $t(72) = 2.11, p < .05$ )
近所の人サポート認知	2.22 (.62)	2.17 (.66)	変化無し
安全効力感	2.02 (.60)	2.01 (.62)	変化無し

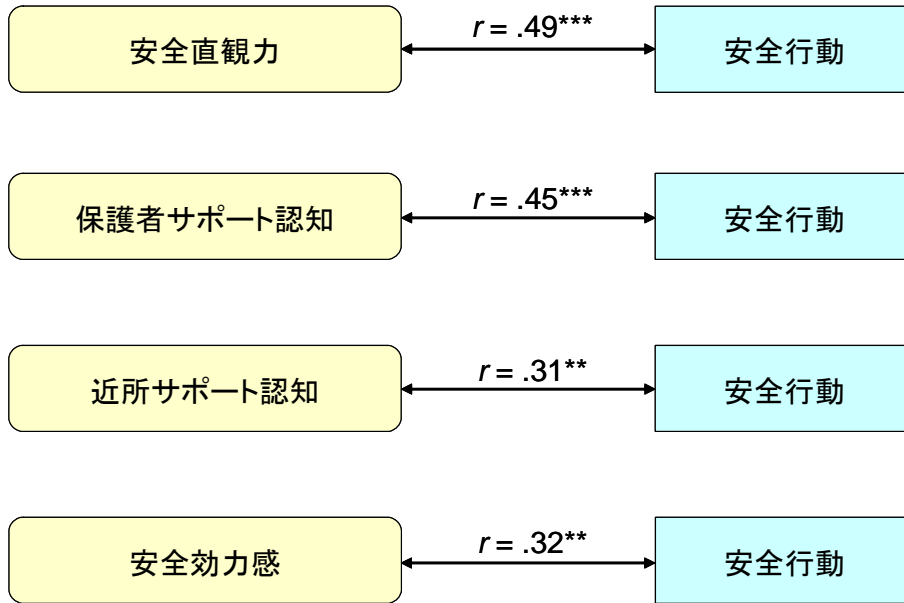
※ 値は平均値 (標準偏差) を示す。

②安全行動と心理変数の関係 (相関分析)

[学習前]

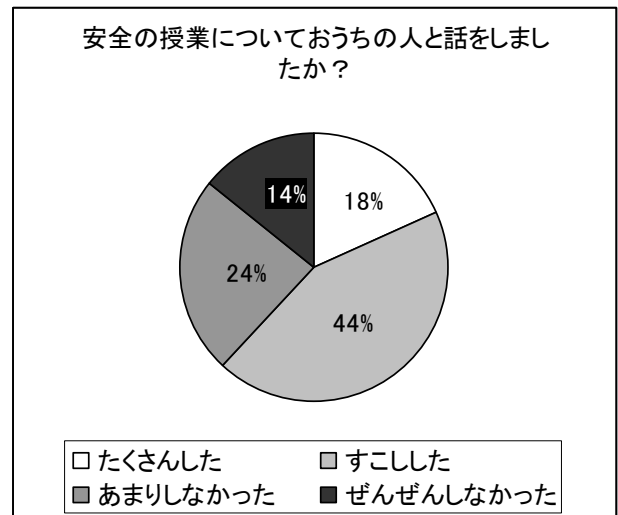
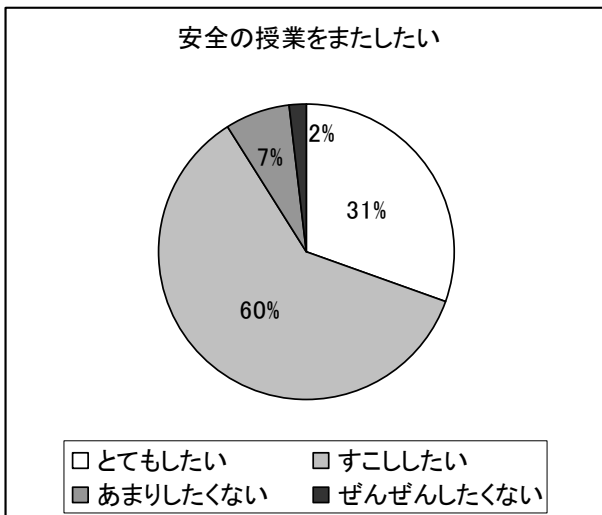
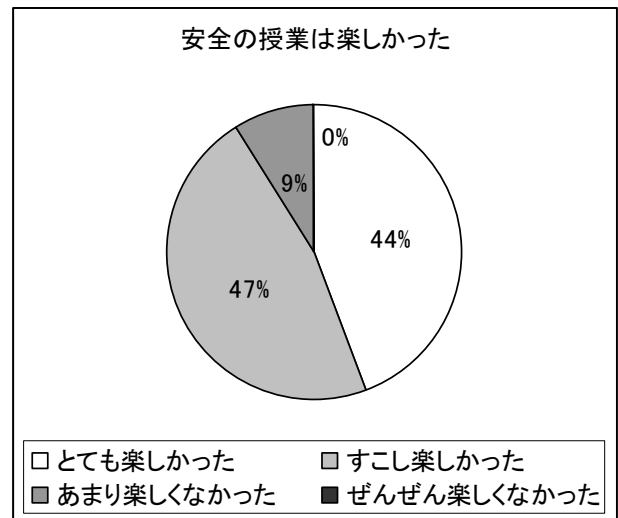
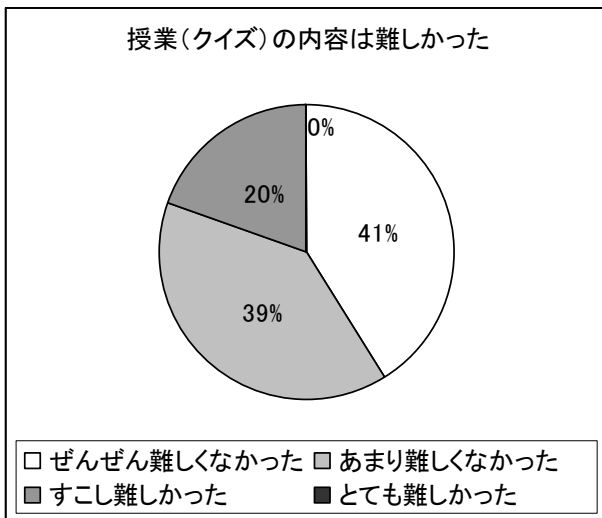


[学習後]



### 3-3-3-3. 高学年アンケートの分析結果

[授業評価]



高学年においても、他の学年とおおむね類似した結果が得られた。  
 授業の楽しさや再学習の動機は高かったと言える。授業の内容の難しさについても、個人差はあるが概ね「難しくない」との評価であった。家庭での会話については、評価が分かれた。

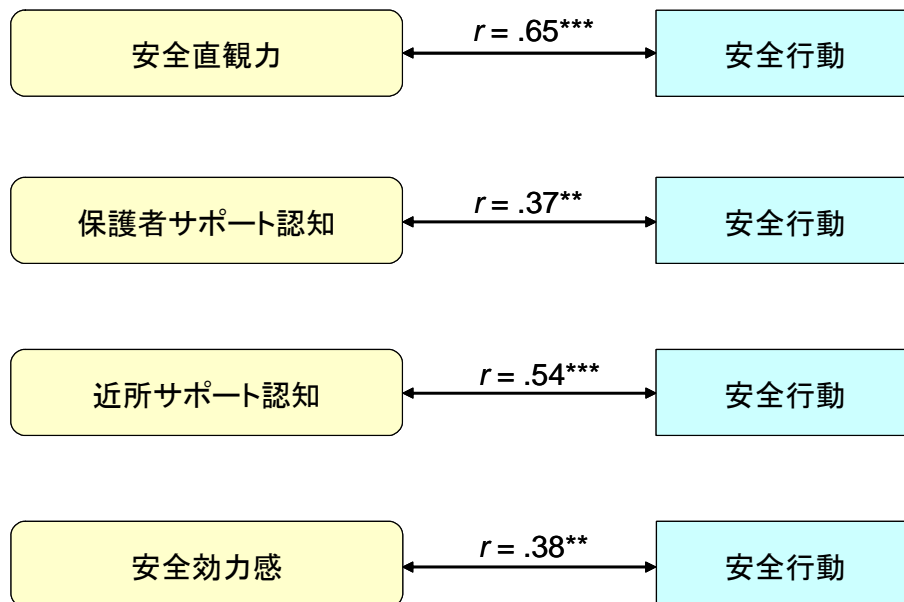
①学習前後の変化 (t 検定)

心理変数	評定値 (4 件法, 0-3)		検定結果
	学習前	学習後	
安全行動	1.60 (.47)	1.75 (.46)	増加 ( $t(72) = 5.07, p < .001$ )
安全直観力	2.13 (.49)	1.98 (.52)	低下 ( $t(72) = 2.87, p < .01$ )
保護者のサポート認知	2.39 (.59)	2.39 (.62)	変化無し
近所の人へのサポート認知	2.13 (.58)	1.96 (.72)	低下 ( $t(72) = 2.18, p < .05$ )
安全効力感	1.82 (.56)	1.79 (.63)	変化無し

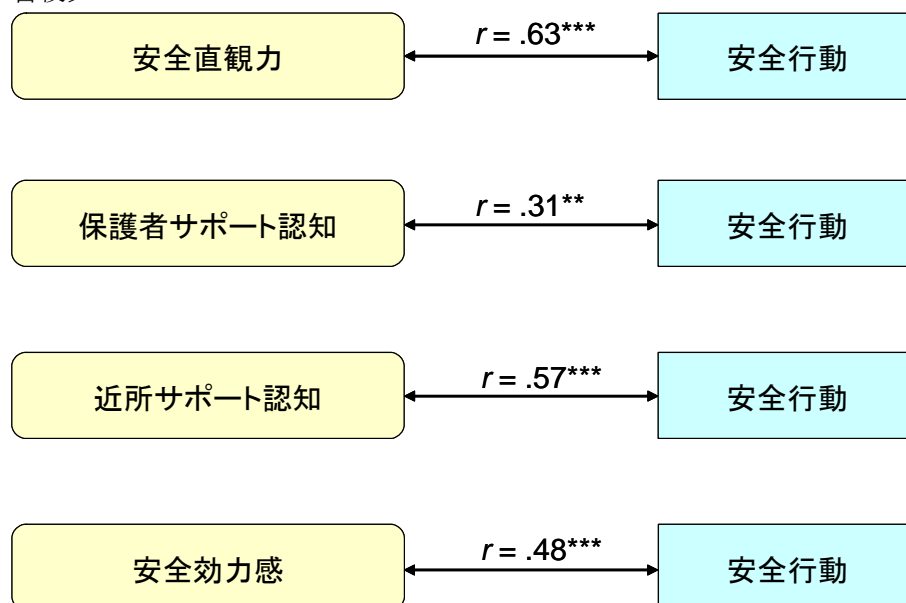
※値は平均値 (標準偏差) を示す。

②安全行動と心理変数の関係 (相関分析)

[学習前]



[学習後]



### 考察

上記の2つの目的について考察を行う。

目的①安全行動とソーシャルサポート認知、安全直観力、安全効力感に正の相関が確認されるかどうかを検討する

中学年と高学年の分析結果から、共通して、ソーシャルサポート認知（保護者、近所の人）、安全直観力、安全効力感はいずれも安全行動と正の相関を持つことが確認された。このことから、安全への共感と協働に基づいた安全教育が有効であるとの本研究開発の主張は支持されたと考えられる。

目的②本研究開発によって開発した e-learning 教材を用いた学習によって、安全行動やソーシャルサポート認知、安全直観力、安全効力感が高まるかどうかを検討する

中学年と高学年の分析結果からは、低学年と同様に、学習後に安全行動が増加することが確認された。このことは、本教材が児童の安全行動の増加に寄与することを示す結果であると考えられる。一方、安全直観力、ソーシャルサポート認知、安全効力感などの心理変数においては、変化しないか、もしくは期待した方向とは逆の変化が確認された。このような結果が生じた背景としては、以下の可能性が考えられる。

第一に、学習によって設問の内容がより明確になった可能性である。例えば、「私は安全に行動できる人だ（安全効力感）」という設問には、学習前には漠然とした自己肯定感が反映された可能性が考えられるが、学習を通して、様々な取るべき安全行動があることに気づいたり、他者からの声かけに対してははっきりと断りにくい状況があることに気づいたりした後は、学習前よりもシビアな評定をするようになる可能性が考えられる。すなわち、学習による理解の深まりにより、より実際の状況を反映した回答をしやすくなった可能性が考えられる。第二に、2回の安全教育（保護者の介入機会は1回）だけでは、安全直観力、ソーシャルサポート認知、安全効力感などの心理要因にまで働きかけていくことが難しい可能性である。例えば、保護者のソーシャルサポート認知などは、通常の親子関係に大きく依存するものであり、1回の介入機会だけでは変化しにくかった可能性が考えられる。第三に、低学年との結果の違いに関してであるが、低学年では学習に対する新規性や保護者の介入意図の高さから、教育効果が生じやすかった可能性が考えられる。例えば、中学年の社会科の学習においては、地域に関する学習が計画されており、安全教育だけでなく通常の教科学習の中でソーシャルサポート認知が高まっていた可能性が考えられる。また、相対的に発達の初期段階にある低学年の方が、保護者が安全教育の重要性を認識しやすく、教育に介入しやすかった可能性が考えられる。以上の考察の妥当性について検証するためには、本教材を用いた教育を今後も継続していく必要があるであろう。

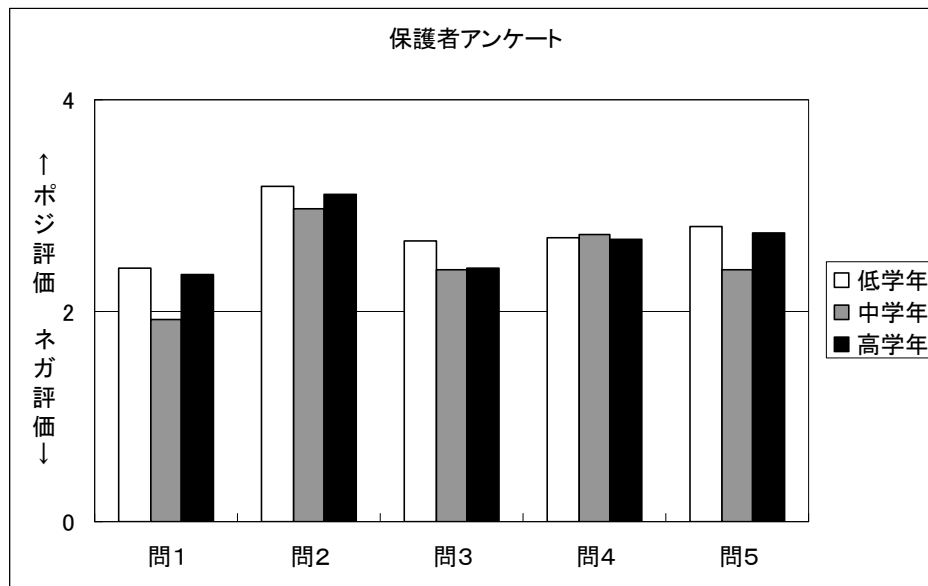
### 3-3-4. 保護者アンケートの概要

保護者に対しては、システムの操作性や有効性に関するアンケートを実施した。  
回答は、各設問について5件法（0から4）で求めた。

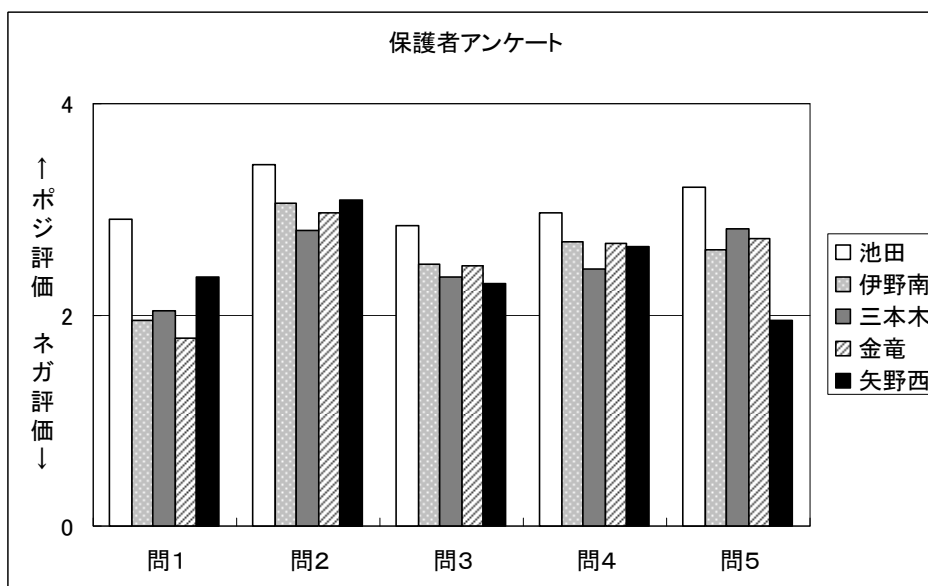
（0:全くそうではない、1:あまりそうではない、2:どちらともいえない、3:少しそうだ、4:とてもそうだ）

- 設問1. システムは操作しやすかった
- 設問2. 子どもが学校でどのような安全学習をしているのかが分かった
- 設問3. システムを利用して子どもと安全について話し合う機会が増えた
- 設問4. システムを利用して学校での安全教育に対する関心が増した
- 設問5. このシステムは子どもの安全教育に有効である

[学年別データ]



[学校別データ]



学年別に見た場合には、顕著な差はない（例えば問1に関して、統計上の差は見られない）  
一方、学校別に見た場合には、池田小学校と一般校に差があった（例えば問1に関して、 $F(1, 192) = 18.16, p < .001$ ）※回収されたアンケート票の数の偏りから、附属池田小学校とそれ以外を比較



〔自由記述データ〕

保護者に対しては、さらに以下の3つの設問に関する自由記述を求めた。

- 設問1. 授業の内容について、ご家庭でお子さまとどのような会話をされましたか。
- 設問2. お子さまとの会話から、今回の安全学習の内容に対して抱かれたご意見や感想がございましたら、ご記入ください。
- 設問3. 今回の **e-learning** を使った安全学習システム（学校での学習成果を家庭の PC や携帯電話で確認し、教員にコメントできるシステム）に関するご意見や感想がございましたら、ご記入ください。

本報告書においては、設問3に関する記述例を示す。

（その他の設問および意見に関しては、各校の実証実験報告書を参照のこと。）

#### <肯定的意見>

- ・ 子どもは、楽しんで学べて、とてもいいプログラムだと思いました。更に、子どもだけでなく、親も同じ情報、関心が得られるのは確かにいいことで、また、家での再教育もでき、親にも必要な知識だと思いました。（低学年）
- ・ 紙の教材よりも、パソコンを利用した学習の方が子ども達は楽しくできるのではないかと思います。（低学年）
- ・ 親が、学校での授業内容、子供の理解度を自宅で見れるのは、大変便利だと思います。親が好きな時間に見れるので。（低学年）
- ・ より多くの方に実感いただき、学習内容をさらに充実いただきたいと思います。実体験できない学習内容であるからこそ、単調にならない繰り返しが重要であると考えております。このたび関与させていただき、その有難さを深く実感しております。（中学年）
- ・ 同じ教材を見て、親の立場で子どもの生活圏に場面を置きかえて話ができるので、より身近に捉えて感じることができます。（中学年）
- ・ システムにより、学校と家庭の物理的な距離が埋まり、子どもの学習内容を親がよりよく理解できるシステムだと思います。書かれた字を読んだり、お話を聞いたりするだけでは、頭ではわかっていても、なかなか見につかないものなので、子どもの興味をひくようなシステムの開発は有用性が高いものと考えます。質問に対してご回答やご教示があることで、システム内に先生方を感じることができました。システムの利用で、学校と家庭の安全に対する考え方を合わせることもでき、子どもたちが、より安定した学習を受けられ、その習得における効率も高まるものと期待しております。（高学年）
- ・ この機会を利用して子供と安全についてお話する事ができたのは確かです。ニュースを見ていてもいつもならさらっと流してしまう事でもこの学習のシステムのおかげで防犯カメラの設置で犯人の確定につながったなどの子供とのコミュニケーションも増え良かったと思います。また家に入る時のただいまと言うちょっとした気づかいなどもまた再度子供と確認し、重要さを話し合えたきっかけになりました。（高学年）
- ・ パソコンの画面を見ての学習はやはり楽しかったようです。キャラクターもかわいく、パソコン操作も出来て、普段の授業とは違った所が良かったみたいです。（高学年）

#### <両面的意見>

- ・ 学習成果をPCで確認し、時間を気にせず連絡できるのはとてもありがたいと思う。ただ、家庭でネット環境はまちまちなので、現実には厳しいのではないかと思います。（低学年）
- ・ もう少し続けて体験してみなければ何とも言えません。もっと時間があれば良かったと思いました。（低学年）
- ・ 学校での成果を家庭でも確認でき、先生のコメントも読めるというシステムは、とてもいいと思いますが、それで教員の仕事が忙しくなるのだったら、どうかな?!と思います。（低学年）
- ・ 初めての事で、戸惑いもありましたが、子どもが興味を持ち取り組み、親としても、多忙な中でのPC操作は大変でしたが、子どもと話をして理解できたのは、貴重な時間だった

- と感じます。システムの説明が、もう少し分かりやすいといいですね。(低学年)
- ・ 学校公開日などに親子で学習できれば分かりやすくなるのでは？(中学年)
  - ・ 私はPCにくわしくなく、主人の助けなしでは見ることもできず、大変だと思っていますが、せっかくなので、頑張って慣れていこうと思います。(高学年)
  - ・ 学習成果を一方通行で、確認できるだけでなく、レスポンスできる仕組みは、よいと思いました。安全に対する意識調査(データ収集)としては有効だと思いますが、パソコンに入力していくことが、子供たちの安全学習として有効かどうかは疑問に思います。パソコンの中では正しい選択肢を選べても、現実世界でそのように対応できるとは、限りません。(高学年)

#### <否定的意見>

- ・ パソコンがなく、携帯電話からのログインでしたが、パスワードが非常に入力しづらく、(英数字を変換しなくてはならないため)ログインまですごく時間がかかりました。また、使い方がよくわからなく結局コメントも入れられないまま終わってしまいました。(低学年)
- ・ わざわざPCや携帯電話で確認するのは面倒だと思います。小さい子どもがいたりすると、なかなかそういう暇もなく・・・口頭や手紙でも十分かと思います。(低学年)
- ・ 安全面をシステム状でやり取りするのは不安を感じる。(低学年)
- ・ 手軽でいいのですが、私はまだ手紙形式のほうが、じっくり考えて意見することが出来るので、システムには賛成できません。(低学年)
- ・ パソコンが得意な人はいいが、そうで無い場合、パソコン操作だけで面倒になり子供と話し合うまでいかない。(中学年)
- ・ アナログ家庭の我が家では、ちょっとどうでしょうか・・・？(高学年)
- ・ このようなシステムで、親が、確認する必要があるのかと思います。子供は、家に帰ってくれば、今日どんな事を勉強してきたのか話すので、それで十分です。(高学年)
- ・ 正直PCも使えない私にとっては、面倒臭いものでした。このようなやり方に時代を感じました。でもこの先、これが当たり前のやり方になっていくと思いますので、頑張ってついて行こうと思います。(高学年)

#### 考察

肯定的意見においては、本教材の理念を理解し、家庭内での話し合いが深められたことを評価するものが多かった。一方、否定的意見においては、普段からパソコンを使用する環境にない場合に理解が得られにくいことが読み取れた。両面的意見としては、教材の有効性についてはある程度評価をしているが、パソコンを操作することの煩わしさや、より良い活用法に関する提案に関する意見が多かった。

### 3-3-5. 教員アンケートの概要

実証実験に参加いただいた教員には、「実験で苦労した点」「教材やシステムの改善を要する点」「実証実験における児童や保護者の反応」「実験に参加してよかったと思うこと」について自由に感想を報告いただいた。以下、主な内容について報告する。

#### <実験で苦労した点>

- ・ 新しい活動が入ることで、学習内容を把握するのに時間が必要になり、削らなければならない時間が生じた。
- ・ 児童用の項目数が多いのでアンケートの回答に時間がかかった。
- ・ 保護者向けについては、返信方法が必ずしもパソコン操作できる環境とは限らないので、保護者が困惑した。
- ・ パソコンを使っの授業で、全員に1台ずつ使うことが出来なかった。また、2年生の授業では、パソコンの授業がないので、パソコンの使い方を指導する時間がなかった。
- ・ 授業を進めるにあたって、全体指導をしながらのパソコン操作だったので、忙しかった。1回目の授業では、事前に用意をしていたが、授業を進めている間にパソコンが停止し、少し戸惑うこともあった。
- ・ 授業を構成する段階で、自作の教材をどの程度盛り込んでよいのか気にしながら、授業の準備を進めた。メインの教材が決まっているので、その開発意図とずれがないか心配した。
- ・ 学校の所在地の状況によって、反応が大きく変わる問題であるように感じた。
- ・ 保護者への参加をお願いするにあたって、呼びかけを手紙でした後、更に、メール配信で再呼びかけをしたことで、回収率が大きく上昇した。
- ・ せっかく保護者からの回答を頂いたが、それについて、もっと上手に授業に利用することができたのではないかと思う。
- ・ 1時間目のeラーニングで、どの教材をいくつ使うか、1時間目の授業でどこまで内容に踏み込むかが難しく感じた。
- ・ 保護者のコメントが全員分集まらなかった。コメントを授業中どのように活用するかをもっと考える必要があると感じた。
- ・ 保護者がネット上で、我が子がどんな答えを出したのかを確認できるのはよいが、コメントを書き込んでもらうように呼びかけるのが少々手間だった。児童が保護者のまなざしや思いを感じるのは、ネット上ではなく、ワークシートにコメントを書いてもらうことの方が有効で、回収率も上がると思う。
- ・ 40人学級の一斉指導の場合、止めて話をすることがあるので、次々に進んでしまうと困ることがある。改良できないか？
- ・ デジタルコンテンツを使って授業をする前に、パソコンルームの整備やフィルタリングの問題があり、担当の先生がとても苦労したと思う。
- ・ 教材化をするのに非常に時間がかかる。ソフト（コンテンツ）を見ながら教材研究しなければならない。板書計画も加えて必要になる。
- ・ 保護者からのコメントがいつ来たか分からないので、いつもチェックしなければいけない。
- ・ 窓口だったので、連絡のやりとりについて、他教員や管理職への報告、連絡などに、意外と時間をつかった。
- ・ システムについて、保護者から、肯定的な意見をいただいた半面、学校からのWEB閲覧のお願いを緊急メール配信したのにもかかわらず、記述が少なかった。
- ・ 保護者のコメントに、教師からコメントを書くべきと思い、記述した。良好的ではあったが、一般的に保護者とのメールのやり取りなどは、禁止されており、関係が良好でない時には、メールで悪化、炎上することが心配である。
- ・ システム上、勤務時間上、帰宅後のチェック（保護者記述）となり、少し負担。

#### <教材やシステムの改善を要する点>

- ・ 保護者が学習に参画する意思がありながらも子どもと家庭で学習にできなかった事例があったことが一番残念だ。本校の保護者は学校に協力的なため、相当の時間をシステムに入る努力をされていた。保護者が児童の学習履歴をみることはこれからの教育ではあっても

いいことだと思う。そのためには、パスワードから簡単に入るシステムにする（手間の数をできるだけ減らす）と同時に、紙ベースでも家庭に配信できることが大事だと思う。全員の保護者が、携帯電話を使用しているとは限らない。まだまだアナログの手だてが必要だ。

- ・ 教材の開発とともに、安全教育における授業づくり(モデル)の研究の必要性を感じた。むしろ、授業づくり(モデル)の開発があって、必要となる教材が挙げられると思う。「e-learning 教材」ありきの印象が強いので、逆の発想で展開していくのも1つの方法ではないかと考える。
- ・ 操作を進める段階で、ユーザーへのフレンドリーさが少し足りないように思った。次の操作に進むのにわかりにくい所もあり、わかりやすい表示がしてあるといいなあとと思った。
- ・ 自校では PC の台数の関係で、スタンドアロンの PC を使った授業だったが、意見をプリントに記入したので、ある程度時間を有効に使えたように感じている。あれが PC 入力だと、それだけでも時間を使うし、思考に集中できない子もいるのではないかと考えた。
- ・ 保護者が「ログインの仕方が分からない」という質問がいくつかあった。確かに保護者用資料ではなかなか分かりにくかった。もう少し分かりやすい説明書にした方がよい。

#### <実証実験における児童や保護者の反応>

- ・ 子どもたちは、ペンギンの様子が変わっていくので楽しんで取り組んでいた。
- ・ パソコンソフトを使った授業だったので、児童の授業に対する態度や発表への意欲が積極的だった。
- ・ クイズ形式で合うと喜んだり、キャラクターのペンギンにペンタくんと名前をつけたりして楽しく学習に取り組むことができた。
- ・ 児童は、楽しく学習出来たようだ。(ペンギンの変身などは大喜びだった。)
- ・ パソコンを使うことで、子供達の興味・関心が高まった。
- ・ パソコンを使い慣れている子とそうでない子の差が大きく、大人の手が足りない場合は操作の補助だけで終わってしまうこともある。内容について考えさせる時間を十分確保するためには、なるべく簡単にできるようになってほしい。
- ・ 紙でもらった方が分かりやすかった。
- ・ 親は何を書いて良いのかわからなかったようだ。
- ・ 保護者の中でパソコンや携帯でのログインに戸惑っていた方が多くいた。
- ・ 保護者の方々は、たいへん協力的にコメントを記入されていた。
- ・ 1 単位時間に児童に考えさせ、それを文章にするのは、プリントに書く方が時間のロスがなく進められると思う。また、保護者の回答が 100%であったのも、児童が自分のプリントにアンケート用紙をつけて返したため、ネットにアクセスすることなしに、直接プリントに書くことできたためだと考える。
- ・ e-learning による学習形態をとっていくためには、保護者がより簡単に子どもの学習ページが見られるように改善する必要があると思うが、保護者からのコメントは手書きの方がより多く集まると思う。
- ・ 保護者の意見を、パソコン入力にする必要はない。授業で取り上げる場合はプリントアウトして読むわけなので、書いてもらえばよい。地域によっては、その方が回収率は上がる。

#### <実験に参加してよかったと思うこと>

- ・ 学習を通して、児童、保護者とも防犯ブザーの電池を補充したり、防犯ブザーをランドセルにつけるなど改善し、安全への意識が高まった。「こわい人はだれ？」選びでは、答えが1つという固定観念が強いので正解を知って驚いていました。
- ・ 授業に保護者のアンケートを使い、保護者の思いや願いを子どもたちに知らせたり、他の保護者の意見を知らせたことは良かった。そして、保護者の声から、安心・安全学習は是非とも続けてほしい要望や、保護者自身が、この学習から日常の言葉がけに気をつけなければならないと思った、とアンケートに述べられている。
- ・ 授業風景を撮影されるということで、より緊張感を持った学びとなり、良い刺激になった。
- ・ 子ども110番の家について、マークがたくさんあることや、学区内にすごくたくさん協力してくれている場所があることを知ることができ、よかった。

- ・ 図書室で、“あんぜん”に関する本を読んでいる子もいた。
- ・ 過去に本校において安全教育に取り組んだ内容について、本実証実験授業を通して、見つめ直すことができたり、新たな視点で授業開発に取り組むことができたりしたのが、大きな収穫であった。
- ・ より安全な行動を意識づけるためには、少なくとも2回の授業によって組み立てると効果的だということがわかった。
- ・ 地域から、防犯について真剣に考える機会が少ない子どもたちなので、今回の授業はもしもの際の対応について考える良い機会となった。特定の保護者から批判的な意見をもらったが、大部分の保護者は今回のような授業は有益だという意見だった。
- ・ システムが開発中であるために長所、短所あるが、このシステムは画期的だと思う。安全について「こうすればよい」というはっきりとした答えはないと思う。はっきりとした答えのないことに、自分なりの答えをもつということはとても貴重だった。「困っている人がいたら…」の内容は、児童だけでなく保護者も悩んでいました。親子、教師と児童ともに悩む、考える教材があったのはよかった。
- ・ 「安全」をどのように教えるのか？教材を何にするのか？など教師は悩むこのシステムがネット上で公開され、日本全国の学校で活用されるようになってほしいと思う。1人1台のPCではなく、大型テレビとPC1台で一斉授業型でも十分に授業ができる。参観日に合わせれば親子共に話し合うきっかけになる。
- ・ この取り組みに関わることができてよかった。このような教材があれば、「安全教育をやりたけれど、どうしたらよいだろう？」と悩む先生方が、進んで授業に取り入れられると思う。せっかく開発したのだから、研究成果を報告して終わりにせず、全国的に使ってもらえる教材ソフトとして使えるように改善し、国や自治体を買ってもらいなりして、ぜひ自分も有効活用してみたいと思っている。
- ・ 保護者の方によっては、学習後に、地域の子ども110番を探しに行くなど、安全について考えるきっかけになったようで、良かったと思う。(なかなかそういう方が少ないのですが・・・) 貴重な体験だった。
- ・ 総合的な時間の町たんけんなどで、「子供110番」を見つける児童がいたことが、授業をやった意義だと思う。
- ・ 危ない危ないという授業が多く、人間不信を育てるという面が気になっていた。考える内容が多く、明るいイメージとなるコンテンツが多くよかった。

#### 考察

「実験で苦労した点」については、授業準備（e-learning 教材をいかに自校の特性に合わせて活用するかを考えること、関係者間の連絡調整）に時間がかかったこと、慣れないパソコンを操作しながらの授業の実施が大変だったこと、保護者の協力が思うように得られなかったこと、保護者とのやり取りに時間がかかったこと、など、労力面での苦労が主に書かれていた。

「教材やシステムの改善を要する点」については、操作性を更に向上させることや、オフラインでも使用できる機能を搭載することに関する要望が書かれていた。

「実証実験における児童や保護者の反応」については、児童はパソコンを用いた学習に興味を示し、ペンギンの衣装の変化などを楽しんでいる様子が書かれていた。一方、保護者については、パソコンの操作に戸惑っている様子が窺え、手書きでコメントを貰う方が望ましいと言う声が多かった。

「実験に参加してよかったと思うこと」については、今回の実験を通して教員自身が新たな気づきを得た例、児童の安全行動や意識が変化したことを実感できた例、保護者からの期待が大きく肯定的な意見が多かったこと、恐怖を喚起するだけでなく明るいイメージで学習できる教材ができたことを好ましく思うことなどが書かれていた。

### 3-3-6. 学習指導案

本教材の開発目標を踏まえた有効な授業法に関するモデルを提示するため、プロジェクト実施者（大阪教育大学附属池田小学校教員）が中心となって学習指導案を作成した。また、地域や学校の特性を踏まえた学習の有効性について検討するため、実証実験に参加いただいた協力校の教員にも実験時に実施した授業内容に関する指導案を作成いただいた。

以下、今回のプロジェクトで作成された学習指導案の例を示す。

授業指導略案	
<b>どこを通る</b>	
授業者 大阪教育大学附属池田小学校 井上 伸一 場所 2年東組教室	
日 時 平成23年3月22日	
学年・組 第2学年東組（37名）	
前時の学習（1/2）	
クイズ形式	タイトル
4択問題（ルックアットピクチャー）	「こわい人ってどんな顔？」
ムービークイズ（ルックアットピクチャー）	「一人で外出するときは…」
本時の目標（2/2）	
前回のデジタルコンテンツを使った学習内容について、教室での振り返り学習を行い、学習効果の定着を図る。 ○安全・安心な通行に興味・関心をもつ。 ○安全・危険な環境をコンテンツを通して調べ、安全な道を選んで通ることの意味について考える。 ○安全・安心な通行のために周囲の環境を注意して見ることの大切さを理解し、安全な道を選んで通行する態度を身につける。	
本時の展開	
○児童の活動・意識の流れ	指導上の留意点
1.【導入】前回のデジタルコンテンツを使った安全学習について振り返る。 ○前回のデジタルコンテンツを使った安全学習の内容について、話し合う。 ● 自分は安全に注意できていると思った。 ● 危険な場所について、知らないこともあった。	○振り返りをするために、デジタルコンテンツのできたことに着目させ、自己の行動について発表する。
2.【第1課題】に取り組む。	
【第1課題】こわい人はどんな顔をしているのかな？「マスクとサングラスをしている人」、「おじさん」、「若い女性」、「若い男性」のイラストから選ぶ。	

○場面 A をみて、自分が選んだ理由について発表する。



- ・ 他人に見られて困るから、マスクやサングラスで顔を隠している。だから悪い人だ。
- ・ 女の人や若い男の人はやさしそう。
- ・ おじさんは、いたずらをしそうで悪い人だ。
- ・ おじさんは、困った時に助けてくれるから、やさしい。

○コンテンツで示された解答「悪い人は見た目ではわかりません。」について、交流する。

- ・ やさしそうに見えても、考えていることはわからない。
- ・ 悪そうに見える人でも、いい人がいる。
- ・ 本当に悪い人は、格好ではわからない。

### 3. 【第 2 課題】に取り組む

【第 2 課題】見たこともない車が止まっているよ。こんなときどうしますか？「車の横を急いで通る」、「道の反対側へ渡って通る」から選ぶ。

○場面 B をみて、自分が選んだ理由について発表する。




- ・ 車の横を急いで通ると、つかまらないから安心。
- ・ 道の反対側へ渡って通れば、連れ込まれない。

○理由を発表できるようにするために、ワークシートに何に着目して選んだのかを考え、選んだイラストとその理由を書く。

○外見で悪い人を判断することが難しいことをとらえるために、善悪の行動はだれもがすることに着目させ、ステレオタイプの自分に気づく。

○理由を発表できるようにするために、ワークシートに何に着目して選んだのかを考え、選んだイラストとその理由を書く。

<p>○コンテンツで示された解答「急に連れ込まれることがあるので、危険です」について、交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもだとすぐつれ込まれるから、道の反対側を通る。</li> <li>・ 交通安全に気をつけて、車から離れて歩く。</li> </ul>	<p>○車による連れ去りについて理解するために、車の側を通ることによる危険をロールプレイし、車から離れて歩くことの安全性に気づく。</p>
<p><b>【第2課題】</b> 明るい道は遠回り、暗い道は近道です。急いで帰りたいです。こんなときどうしますか？「暗いけど近い道を通る」、「遠回りだけど明るい道を通る」から選ぶ。</p>	
<p>○場面 C をみて、自分が選んだ理由について発表する。</p> 	<p>○理由を発表できるようにするために、ワークシートに何に着目して選んだのかを考え、選んだイラストとその理由を書く。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 暗い道は近道で、早く帰れるから安心。</li> <li>・ 遠回りだけど、明るい道は何かあっても気づいてもらえるから安心。</li> </ul>	
<p>○コンテンツで示された解答「できるだけ明るく、人通りの多い道を選んで、帰りましょう」について、交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 明るい道、見通しがよく、悪い人や悪いことをされそうなことに早く気づくことができる。</li> <li>・ 人通りが多いと、悪いことをされても、大声を出せば、すぐに助けてもらえる。</li> </ul>	<p>○犯罪の可視性に気づくために、明るいところの様子や人通りが多い場所を想起させ、見えやすさや、見守られやすさに気づく。</p>
<p><b>【第2課題】</b> 友だちのところに遊びに行くところ。いろんな道があるけど、どの道を通って行こうかな？「人通りの多い商店街」、「塀に囲まれた住宅街」から選ぶ。</p>	



○場面 D をみて、自分が選んだ理由について発表する。



- ・ 人通りの多い道は、周りに人がいるから助けられて安心。
- ・ 住宅街は、人がたくさん住んでいるから安心。
- ・ 柵に囲まれていて、何かされても気づいてもらえない。

○コンテンツで示された解答「できるだけ人通りの多い道を選んで、帰らしましょう」について、交流する。

- ・ たくさん人がいると、何かあっても早く気づいてもらえる。
- ・ たくさんの目があると、早く捕まるから悪いことをしにくい。

#### 4.【まとめ】学習を振り返る。

○ワークシートに振り返りを書き、発表する。

- ・ 見通しが悪いので、暗い道を歩かず、明るい道を通る。
- ・ 悪い人が乗っているかもしれない車の側は通らない。
- ・ 誰が悪いかはぱっと見てわからないので、周りをよく見て気をつける。

○理由を発表できるようにするために、ワークシートに何に着目して選んだのかを考え、選んだイラストとその理由を書く。

○犯罪の可視性に気づくために、人通りが多い場所を想起させ、見えやすさや、見守られやすさに気づく。

○なにかあった時の行動について想起するために、「いかのおすし」に着目し、いざという時のことを考える。

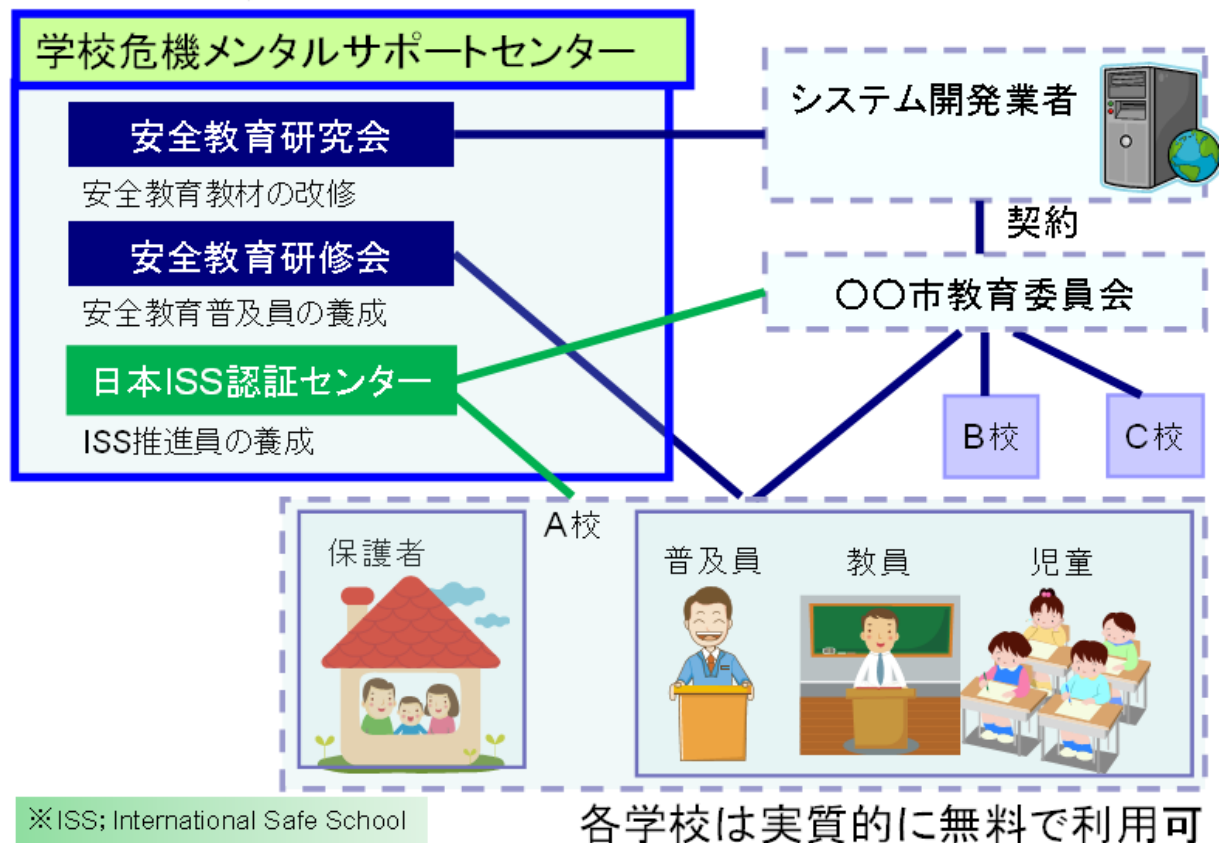
○振り返りの記述をするために、コンテンツの内容に着目させ、これからどうするかについて考えを書く。

### 3-4. 今後の成果の活用・展開に向けた状況

本研究開発において作成した e-learning 教材の運用に関しては、上述の通り、外部企業（本システム開発に携わっていただいた企業）に委託する予定である。この外部企業と教育委員会との間にシステム使用契約を結び、各学校では実質的に無料で教材を利用できるようにする予定である。

一方、社会の変化等による教材内容の修正の必要が生じた場合には、本研究開発に携わった実施者が引き続き教材内容の検討を行う。具体的には、大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター内にプロジェクト事業を立ち上げ、「安全教育研究会」を設置して教材検討を継続する。また外部企業に運用を委託する際に危惧されることとして、教材の理念や趣旨を理解しないまま教材が使用される可能性が考えられる。そこで、本研究開発教材を使用する学校の代表者（1名以上）を対象とした指導者研修を事前に受講することを本教材の利用条件とする。具体的には、大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター内にプロジェクト事業を立ち上げ、「安全教育研修会」を設置して、指導者養成（安全教育普及員：仮称）を目的とした研修会を実施する。研修会の講師は本プロジェクトの実施者が担当することとする。

## 社会実装の方法



### 3-5. プロジェクトを終了して

本プロジェクトの開始当初の学校教育現場では、子どもたちを対象とした安全に関する学習を充実していく必要性は広く認識されていたものの、学習指導要領に明記された各教科の年間授業時間数等の規定によって、各学校において十分な安全学習を展開していくための授業時数を確保することが困難であった。例えば小学校学習指導要領では、安全に関する学習は、「体育科」保健領域の一部や小学校低学年の「生活科」や高学年の「社会科」で部分的な内容を扱うことが規定されているものの、安全に関する学習は「学校における教育活動全体を通じて適切に行う。」という表現が使われている状況であった。また教育現場の教員にとって、子どもたちに対して安全について教育する必要性は感じつつも、具体的に、いつ、どのような内容を、どのよう教えれば効果があるのかという教育方法論に関わる教材研究の情報や実績がほとんど蓄積されていない状況にあった。このような中で、当プロジェクトの取り組みによって、低・中・高学年に分類した安全、特に登下校時の安全に関わる教育のための教材構造を提案することができたことで、実証実験授業に参加した教員のみならず、日本各地で小学生を対象とした安全に関する教育の展開を考えている教員に、安全教育に取り組む動機を形成する一因を与えることができたものと評価している。このことは平成24年4月27日に閣議決定された「学校安全の推進に関する計画」の中に示された「国は、学校における安全に関する指導が系統的・体系的になされるよう、学校現場で実際に行われている安全教育の効果を検証するとともに、各教科等における安全に関する指導内容を整理し、学校現場に対して分かりやすく示す。」という取り組みに対する具体的な支援につながる成果であると自負している。

また一方で、日本の小学校で展開されていた e-learning 教材の多くは、算数や理科・社会などの領域で、明確な正解が得られる設問の設定が可能な単元や教材の中で開発されているが、「安全」が扱う学習内容は、一義的な正解が得られない場面も多く想定される。例えば「見知らぬ、困っている人への手助け」という場面では、「安全」を基準とした判断と「道徳」を基準とした判断が一致しない場合がある。このよう安全に関わって多面的な価値判断を伴う課題について子どもたちに考えさせるためには、学校の教員のみによる指導では不十分であり、保護者の積極的な参加と協力が不可欠となるが、従来の学校における学習活動では、参観日等の学校行事に伴う単発的な参加は得られるものの、継続した参加は得られにくい状況であった。しかしながら、本システムへの保護者の参加により、わが子の安全に対する保護者の意識が強化され、家庭における親子間の安全に関する会話が促されるという効果が報告されている。さらに子どもたちにとって、保護者から寄せられる自分たちの安全に対する思いを受け止めることで、具体的な安全行動の改善につながり、加えて、大切に思われているという自尊感情や地域への信頼に基づく安心感の育成に寄与しているデータが得られた。このことも前述した「学校安全の推進に関する計画」の中の「家庭との連携強化」に関わる〈課題と方向性〉において述べられている「ほとんどの保護者や地域住民は、学校の安全計画や安全教育等の学校安全に関する情報を十分に把握していない。学校安全に関する情報を保護者等が得て、それを地域に活用していくことが重要である。そのため、学校は、保護者等が来校する機会等を捉えて、学校の安全計画や安全教育等の学校安全の取組を周知することが期待される。」という国の考える方向性を補完・支援するものと考えているところである。

前述した「学校安全の推進に関する計画」では、「子どもへの安全教育は、将来につながる安全意識・能力の基盤を培うものであり、長期にわたる教育の継続によって、次代を担う子どもたちに安全に関する考え方を定着させる効果がある。また、子どもに対する安全教育がなされることにより、適切な指導を受けた子どもが緊急時に率先して避難行動をとり、安全意識が必ずしも高くない大人に避難を促すという効果も期待できる。こうしたことから、中長期的な視点で考えた場合、学校教育において安全に関する指導を行うことは、次代の安全文化を構築するという意義も担っている。」と述べられ、さらに「進んで安全で安心な社会づくりに参加し、貢献できる力を身に付ける教育を進めていくべきあり、自助だけでなく、共助、公助（自分自身が、社会の中で何ができるのかを考えさせること等も含む）に関する教育も重要である。その上で、家族、地域、社会全体の安全を考え、安全な社会づくりに参画し、自分だけでなく他の人も含め安全で幸せに暮らしていく社会づくりを目指すところまで安全教育を高めていくことが望ましい。」と述べられている。今回のプロジェクトでは、子どもたちの安全学習活動に保護者の参加を求めるまでの実証実験であったが、さらに、日ごろのスクールガードリーダーなど地域の安全活動に従事してお

られる関係者を巻き込んだ中・長期的な学習システムとして運用実験を継続することができたならば、より安全文化が構築された社会の担い手となる子どもたちの育成に貢献するシステムになるものと期待しているところである。

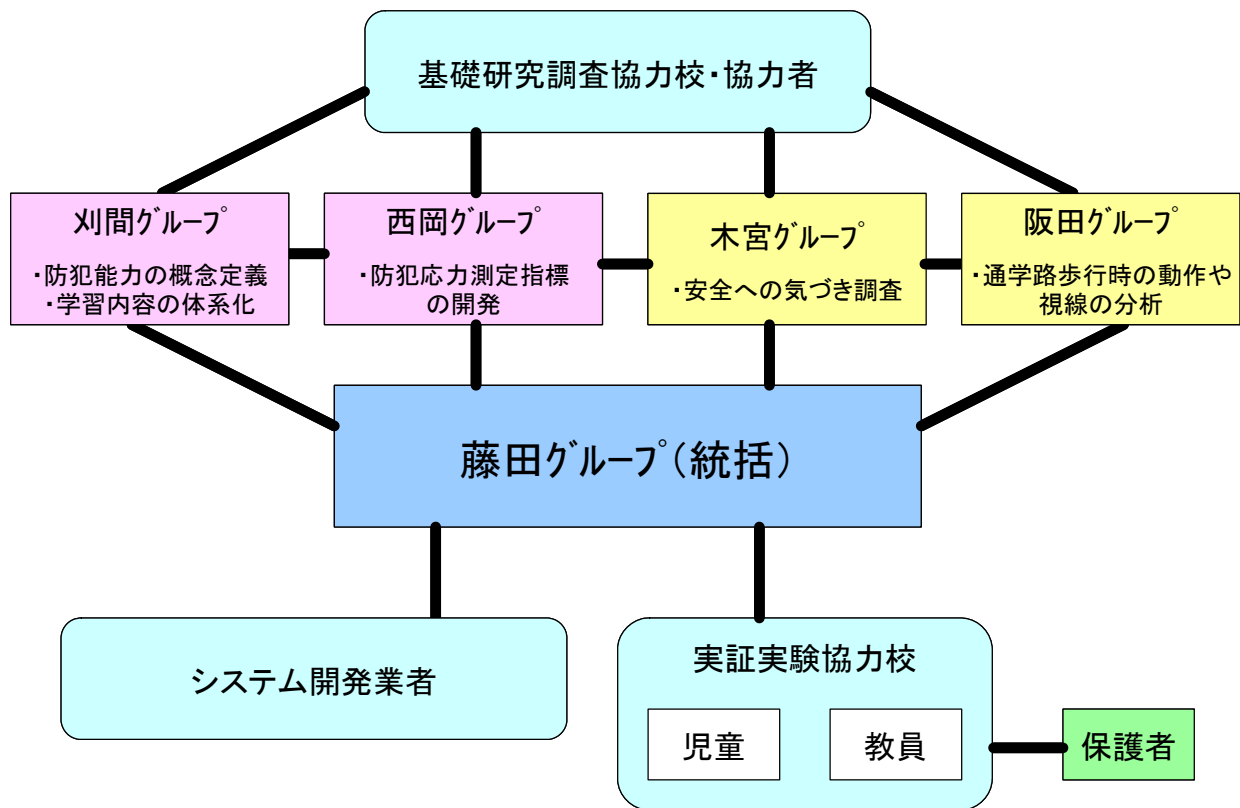
現在、保護者や教職員、地域の大人の人々から守られている小学生たちも、10年たてば大人になり、その時には安全推進の実践者となって地域の子どもの安全を守る立場になって活躍してくれることを期待したい。まさに今回のプロジェクトが目標とする「安全への共感と協働」の上に、世代を超えた「安全のPDCAサイクル」が回転し、持続可能な「犯罪からの子どもの安全」の取り組みが効果的に展開されていくことを願っているところである。



実施者会議にて（平成24年9月6日撮影 学校危機メンタルサポートセンター）

#### 4. 研究開発実施体制

##### 4-1. 体制



#### 4-2. 研究開発実施者

##### ① e-learningシステム構築グループ（研究統括グループ）

氏名	所属	役職	研究開発項目	参加時期			
				開始		終了	
				年	月	年	月
藤田 大輔	大阪教育大学	教授	全体統括	19	10	24	9
豊沢 純子		講師	実証実験の評価	20	4	24	9
中川 亜也子		技術補佐員	実証実験サポート	22	6	24	9
三崎 宏美				23	12	24	9
内藤 英恵				20	4	22	3
佐々木 靖	大阪教育大学 附属池田小学校	校長	学習指導案の検討 実証実験サポート	19	10	24	9
井上 伸一		主幹教諭		21	4	24	9
松井 典夫		教諭		20	4	24	9
浅田 正志				19	10	24	9
佐藤 学				21	4	22	3
垣内 幸太				21	4	24	9
能川 正人				23	4	24	9
岩井 陽介				24	4	24	9
原田 朋哉				24	4	24	9
小山 健蔵				大阪教育大学	教授	教材構造の検討	19
大道 乃里江	准教授	22	4		24		9
河野 奈美	大阪電気通信大学	准教授	実証実験サポート	19	10	24	9
徳珍 温子	大阪信愛女学院 短期大学	准教授		20	4	24	9
内海 千種	徳島大学	准教授	評価指標の検討	20	4	24	9
刈間 理介 <sup>注1)</sup>	東京大学	准教授	子どもの防犯能力 の概念定義と内容 分析	21	4	22	3
衛藤 隆 <sup>注1)</sup>		教授		21	4	22	3

越智 啓太 <sup>注1)</sup>	法政大学	教授	防犯能力の測定指標の検討	21	4	22	3	
村上 元良 <sup>注1)</sup>	京都府中丹教育局	指導主事		21	4	22	3	
西岡 伸紀 <sup>注1)</sup>	兵庫教育大学	教授		21	4	22	3	
武藤 孝司 <sup>注1)</sup>	獨協医科大学	教授		21	4	22	3	
藤井 紘子 <sup>注1)</sup>		大学院生		21	11	22	2	
木宮 敬信 <sup>注2)</sup>	常葉学園大学	准教授		教材内容の検討 実証実験サポート	22	4	24	9
阪田 真己子 <sup>注2)</sup>	同志社大学	准教授			22	4	24	9

注1) 平成21年3月までは他グループ

注2) 平成22年3月までは他グループ

② 子どもの防犯能力に関わる概念構造の分析グループ

氏名	所属	役職	研究開発項目	参加時期			
				開始		終了	
				年	月	年	月
刈間 理介	東京大学	准教授	子どもの防犯能力 の内容分析	19	10	21	3
衛藤 隆		教授		19	10	21	3
越智 啓太	法政大学	教授		19	10	21	3
村上 元良	京都府中丹教育局	教育主事		19	10	21	3

③ 防犯能力の測定指標の開発グループ

氏名	所属	役職	研究開発項目	参加時期			
				開始		終了	
				年	月	年	月
西岡 伸紀	兵庫教育大学	教授	防犯能力の測定 尺度の検討	19	10	21	3
武藤 孝司	獨協医科大学	教授		19	10	21	3

④ 子どもの安全意識の構造解析グループ

氏名	所属	役職	研究開発項目	参加時期			
				開始		終了	
				年	月	年	月
木宮 敬信	浜松大学	准教授	安全に関する意識 構造の分析	19	10	22	3
村上 佳司	天理大学	准教授		19	10	22	3
辰本 頼弘	関西福祉科学大学	准教授		19	10	21	3
西牧 真理		講師		19	10	21	3
中菌 伸二	びわこ成蹊スポーツ大学	准教授		19	10	22	3
長谷川 ちゆ子	湊川短期大学	教授		19	10	22	3
堀 清和	兵庫医科大学	研究生		19	10	22	3

⑤ 子どもの防御反応の行動解析グループ

氏名	所属	役職	研究開発項目	参加時期			
				開始		終了	
				年	月	年	月
阪田 真己子	同志社大学	准教授	防御反応・行動特性 の計測と解析	19	10	22	3
村上 征勝	同志社大学	教授		19	10	21	3
八村 広三郎	立命館大学	教授		19	10	21	3
鈴木 直人	同志社小学校, 同志社大学	校長, 教授		20	4	21	3

※実施者の所属・役職は、参加終了時のものを示す



#### 4-3. 研究開発の協力者

氏名・所属・役職（または組織名）	協力内容
岡 則明・いの町立伊野南小学校・校長	実施者と協力して実証実験を行う 学習指導案を作成する
松本 康平・天草市立佐伊津小学校・校長	
西塚 徹夫・十和田市立三本木小学校・教頭	
飯島 仁・出雲市立遙堪小学校・教頭	
矢崎 良明・板橋区立高島第一小学校・校長	
牛島 三重子・台東区立金竜小学校・校長	
保手濱 和益・広島市立矢野西小学校・校長	
田中 和枝・宇治市立小倉小学校・教諭 京都府教育委員会・指導主事	
刈間 理介・東京大学・准教授	プロジェクトの進捗状況や教材開発 の内容等について、助言を行う
衛藤 隆・東京大学・教授 日本子ども家庭総合研究所・所長	
越智 啓太・法政大学・教授	
村上 元良・綾部市立中筋小学校・教頭	
西岡 伸紀・兵庫教育大学・教授	
武藤 孝司・獨協医科大学・教授	
村上 佳司・天理大学・准教授	
中藺 伸二・びわこ成蹊スポーツ大学・准教授	
長谷川 ちゆこ・湊川短期大学・教授	
堀 清和・兵庫医科大学・研究生	

※協力者の所属・役職は、参加終了時のものを示す

## 5. 成果の発信やアウトリーチ活動など

### 5-1. ワークショップ等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
平成 22 年 10 月 20 日	第三者評価委員候補者との打ち合わせ	春日井市役所	10 名程度	普段からの安全の取り組みに関する情報交換および第三者評価委員就任の要請
平成 22 年 11 月 12 日	RISTEX 小泉 PJ とのミーティング	大阪教育大学 学校危機メンタルサポートセンター	5 名	研究内容に関する意見交換
平成 23 年 3 月	JST「犯罪からの子どもの安全」全国キャラバン	輝きプラザきらら	不明	RISTEX 平田 PJ 主催のキャラバンにおける基調講演、教材デモンストレーション
平成 23 年 8 月 4 日	実証実験事前説明会 ・伊野南小学校	伊野南小学校	4 名	実証実験事前説明会
平成 23 年 10 月 9 日	実証実験事前説明会 ・佐伊津小学校 ・三本木小学校	チサンホテル 新大阪	12 名	実証実験事前説明会
平成 24 年 1 月 21 日	実証実験事前説明会 ・遙堪小学校 ・高島第一小学校 ・金竜小学校	チサンホテル 新大阪	11 名	実証実験事前説明会
平成 24 年 5 月 24 日	実証実験事前説明会 ・矢野西小学校	矢野西小学校	8 名	実証実験事前説明会
平成 24 年 7 月 12 日	RISTEX 平田 PJ とのミーティング	大阪教育大学 学校危機メンタルサポートセンター	6 名	評価尺度のアンケート及びポータルサイトについての意見交換

## 5-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

### 【平成20年度】

1. 西岡伸紀（兵庫教育大学）：子ども安全フォーラム1.16（地域ぐるみの学校安全体制整備推進モデル校・文部科学省 指定），地域ぐるみの学校安全，神戸市立竹の台小学校，神戸市，平成21年1月16日
2. 藤田大輔（大阪教育大学）：内閣府主催 平成20年度地域における青少年育成団体等による子どもの安全確保モデル事業，大阪府子どもの安全確保に関する基礎セミナー，共感・共生を基盤とした子どもたちの安全意識の形成について，和泉市，平成21年3月1日
3. 藤田大輔（大阪教育大学）：大阪教育大学メンタルサポートセンター第6回センターフォーラム，基調報告，「犯罪からの子どもの安全を目指したe-learningシステムの構築の可能性と課題」，「犯罪からの子どもの安全を目指した安全教育構築の取り組み」，大阪教育大学メンタルサポートセンター，池田市，平成21年3月6日
4. 刈間理介（東京大学）：大阪教育大学メンタルサポートセンター第6回センターフォーラム，シンポジウム，「犯罪からの子どもの安全を目指したe-learningシステムの構築の可能性と課題」，「子どもの防犯能力の概念構造の観点から」，大阪教育大学メンタルサポートセンター，池田市，平成21年3月6日
5. 西岡伸紀（兵庫教育大学）：大阪教育大学メンタルサポートセンター第6回センターフォーラム，シンポジウム，「犯罪からの子どもの安全を目指したe-learningシステムの構築の可能性と課題」，「子どもの防犯概念の評価指標の観点から」，大阪教育大学メンタルサポートセンター，池田市，平成21年3月6日
6. 武藤孝司（独協医科大学）：大阪教育大学メンタルサポートセンター第6回センターフォーラム，シンポジウム，「犯罪からの子どもの安全を目指したe-learningシステムの構築の可能性と課題」，「安全教育におけるPDCAサイクルの観点から」，大阪教育大学メンタルサポートセンター，池田市，平成21年3月6日
7. 藤田大輔（大阪教育大学）他：第2回「犯罪からの子どもの安全」シンポジウム，ポスター発表，「犯罪からの子どもの安全を目指したe-learningシステムの開発」，東京大学生産技術研究所，東京，平成21年3月10日

### 【平成22年度】

1. 藤田大輔（大阪教育大学）他：第3回「犯罪からの子どもの安全」シンポジウム，ポスター発表，「犯罪からの子どもの安全を目指したe-learningシステムの開発」，時事通信ホール，東京，平成22年3月16日

### 【平成21年度】

1. 西岡伸紀（兵庫教育大学）：子どもの安全をまもるための包括的な対策と防犯教育と医学，57，4-13
2. 西岡伸紀（兵庫教育大学）他：研究開発プロジェクト「犯罪からの子どもの安全を目指したe-learningシステムの開発」「防犯能力の測定指標の開発グループ」平成19年度～21年度研究報告，平成21年3月

3. 木宮敬信（浜松大学）他：「子どもの安全意識についての調査集計結果」（協力小学校用）平成21年6月
4. 木宮敬信（浜松大学）他：「子どもの安全意識についての調査集計結果」（教育委員会用）平成21年6月
5. 木宮敬信（浜松大学）他：「『犯罪からの子どもの安全』に関する基礎調査調査報告書」平成22年3月
6. 藤田大輔（大阪教育大学）他：第4回「犯罪からの子どもの安全」シンポジウム，ポスター発表，「犯罪からの子どもの安全を目指したe-learningシステムの開発」，コクヨホール，東京，平成23年2月13日

#### 【平成23年度】

1. 藤田大輔（大阪教育大学）：JST「犯罪からの子どもの安全」全国キャラバン 地域の力で進める「子どもの安全」基調講演「e-learningで学ぶ安全ー教材デモンストレーションー」講演、パネルディスカッション「地域の力で進める「子どもの安全」パネリスト，平成23年3月5日，輝きプラザきらら（大阪府枚方市）
2. 藤田大輔（大阪教育大学）：第2回教育ITソリューションEXPO・専門セミナー，附属池田小の安全管理の取り組みー10年前の事件から世界的に評価されるまで，平成23年7月9日，東京ビッグサイト
3. 藤田大輔（大阪教育大学）他：第5回日本セーフティプロモーション学会，作成したe-learning教材を展示発表，平成23年18日-19日，大阪教育大学 学校危機メンタルサポートセンター
4. 藤田大輔（大阪教育大学）：平成23年度研究成果発表会（大阪教育大学主催），作成したe-learning教材を展示発表，平成24年3月22日，大阪教育大学柏原キャンパス

#### 5-3. 論文発表（国内誌 10 件、国際誌 0 件）

1. 豊沢純子（大阪教育大学）・藤田大輔（大阪教育大学）：児童はどのように犯罪者と要援助者を区別しているかー小学校3年生児童を対象とした検討ー，安全教育学研究，印刷中。
2. Kiyokazu Hori（関西福祉科学大学），Takanobu Kimiya（常葉学園大学）他：Grade and Sex Differences in Safety Consciousness, Knowledge and Behavior in Primary School Students、日本健康教育学会誌，19，289-301，平成23年
3. 村上佳司（天理大学）・堀清和（関西福祉科学大学），木宮敬信（常葉学園大学）他：小学生の安全と防犯教育の関連，日本教育保健学会年報，18，15-32，平成23年
4. 木宮敬信（浜松大学）・阪田真己子（同志社大学）他：携帯電話および防犯ブザーの所持が児童の安全能力に与える影響，学校危機とメンタルケア，3，44-55，平成22年

5. 木宮敬信（浜松大学）・堀清和（関西福祉科学大学）他：小学生を対象とした安全に関する調査の分析，安全教育学研究，10，47-55，平成22年
6. 堀清和（兵庫医科大学）他：安全教育のためのeラーニング教材開発に関する基礎安全教育学研究，9，49-56，平成21年
7. 藤田大輔（大阪教育大学）：共感・共生を基盤とした「学校安全」の展開 ―危険発生論から安全共感論に基づく学校安全へ―，学校危機とメンタルケア，1，3-10，平成21年
8. 西岡伸紀（兵庫教育大学）・武藤孝司（独協医科大学）他：小学生の防犯能力の測定，評価に関する予備的研究―誘拐防止を中心とした先行研究の分析―，日本セーフティプロモーション学会誌，2，74-78，平成21年
9. 豊沢純子（大阪教育大学）・藤田大輔（大阪教育大学）：ドイツ連邦共和国における学校安全の取り組み ―ベルリン市ノイケルン区の小学校を訪問して―，学校危機とメンタルケア，1，11-18，平成21年
10. 藤田大輔（大阪教育大学）：「学校安全」の授業配信実験 ～四大学連携によるeラーニング授業として～，大阪教育大学情報処理センター年報，12，16-17，平成21年

#### 5-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

##### ①招待講演（国内会議0件、国際会議3件）

1. Daisuke Fujita（大阪教育大学）：Safety education and safety management at Ikeda elementary school as a model school for safety promotion in Japan, 2009 Forum of Taiwan international safe school and safe & healthy school, 台北（台湾），平成21年10月23日
2. Daisuke Fujita（大阪教育大学）：The Newest Trial on the Safety Management and Safety Education for Schoolchildren in Japan, 2011 Taiwan International Safe School Conference, 台北（台湾），平成23年11月
3. Daisuke Fujita（大阪教育大学）：日本における安全教育と安全管理について，学校安全管理国際学術研究会 - 安全、誠信と学校管理（浙江大学），杭州（中華人民共和国），平成24年3月

##### ②口頭講演（国内会議16件、国際会議3件）

###### ②-1. 国内会議

1. 木宮敬信（浜松大学）・藤田大輔（大阪教育大学），他：小学生の安全意識に関する実態調査，日本安全教育学会第9回東京大会，玉川大学，平成20年9月14日
2. 辰本頼弘（関西福祉科学大学）・藤田大輔（大阪教育大学）他：小学生を対象とした安全意識の分析，日本安全教育学会第9回東京大会，玉川大学，平成20年9月14日
3. 堀清和（関西福祉科学大学）・藤田大輔（大阪教育大学）他：教材開発に向けた安全意識の

研究, 日本安全教育学会第9回 東京大会, 玉川大学, 平成20年9月14日

4. 松井典夫(大阪教育大学附属池田小学校)・藤田大輔(大阪教育大学)他:小学校における AED を用いた「命の教育」の有効性に関する実証的研究, 日本安全教育学会第9回東京大会, 玉川大学, 平成20年9月14日
5. 西岡伸紀(兵庫教育大学)・藤田大輔(大阪教育大学)他:小学生の防犯能力の評価方法に関する研究;誘拐防止を中心とした先行研究の分析, 第2回日本セーフティプロモーション学会学術大会, 東京都老人総合研究所養育院講堂, 平成20年10月10日
6. 藤田大輔(大阪教育大学):小学生を対象とした安全教育の視点からセーフティプロモーションを考える, 第2回日本セーフティプロモーション学会学術大会, 東京都老人総合研究所養育院講堂, 平成20年10月11日
7. 藤田大輔(大阪教育大学):犯罪から子どもを守る, 平成20年度日本安全教育学会研究集会, 国立淡路青少年交流の家, 兵庫県南あわじ市, 平成21年2月1日
8. 木宮敬信(浜松大学)他:児童の安全意識と行動に影響を及ぼす要因とは, 第18回日本健康教育学会, 東京大学, 平成21年6月21日
9. 刈間理介(東京大学)他:小学生の防犯教育の内容に関する検討ー子供の防犯関連書籍の内容分析に基づく検討から, 第3回日本セーフティプロモーション学会学術大会, 青森県十和田市, 平成21年8月29日
10. 木宮敬信(浜松大学)他:児童の安全意識・行動と学校特性との関連について, 第10回日本安全教育学会, 東京学芸大学, 平成21年9月19日
11. 阪田真己子(同志社大学)他:通学路踏査による児童の安全行動の定量化, 第10回日本安全教育学会, 東京学芸大学, 平成21年9月19日
12. 堀清和(兵庫医科大学)他:児童の安全に対する「気づき」について, 第10回日本安全教育学会, 東京学芸大学, 平成21年9月19日
13. 刈間理介(東京大学)他:子供の防犯関連書籍の分析に基づく小学生の防犯教育の内容に関する検討, 第10回日本安全教育学会大会, 平成21年9月20日
14. 松井典夫(大阪教育大学附属池田小学校)他:児童の直感に基づいた危険予知・回避能力を育む安全学習の在り方 ~児童の実態と犯罪機会論の比較から~, 第10回日本安全教育学会大会, 東京学芸大学, 平成21年9月20日
15. 木宮敬信(浜松大学)・阪田真己子(同志社大学):家庭内における児童と保護者の安全意識の相違について~同一設問における回答齟齬家庭の特徴~, 第11回日本安全教育学会, 東北大学, 平成22年9月19日
16. 井上伸一(大阪教育大学附属池田小学校)・藤田大輔(大阪教育大学)他:分析の視点を育てる安全教育の授業構成, 第11回日本安全教育学会, 東北大学, 平成22年9月19日

## ②-2. 国際会議

1. Nobuki Nishioka(兵庫教育大学): Education for prevention of injury and crime victims in elementary and junior high schools in Japan. The first Asia-Pacific conference on health promotion and education 幕張メッセ, 平成21年7月19日

2. Risuke Karima (東京大学) :How can we promote individual “Safety Competence” for injury prevention and safeguard from crime victims? The first Asia-Pacific conference on health promotion and education 幕張メッセ, 平成21年7月19日
3. 浅田正志 (大阪教育大学附属池田小学校)・佐々木靖 (大阪教育大学附属池田小学校)・藤田大輔 (大阪教育大学) : Construction of safe studies “ANZEN-KA” of International Safe School , The 20<sup>th</sup> Safe Community Conference 2011 (第 20 回セーフコミュニティー国際会議), Falun(Sweden 王国), 平成 23 年 9 月

③ポスター発表 (国内会議  2  件、国際会議  2  件)

③-1. 国内会議

1. 豊沢純子 (大阪教育大学)・藤田大輔 (大阪教育大学), 保護者の安全教育への関与が児童の安全行動に及ぼす効果, 日本社会心理学会第52回大会, 愛知, 平成23年9月
2. 豊沢純子 (大阪教育大学)・藤田大輔 (大阪教育大学), 小学校中学年児童の対人認知の特徴ー「要援助者」と「犯罪者」を区別する基準とはー, 日本心理学会第75回大会, 東京, 平成23年9月

③-2. 国際会議

1. Takanobu Kimiya (浜松大学) 他 Safe behavior awareness survey for primary school children, The first Asia-Pacific conference on health promotion and education, 幕張メッセ, 平成21年7月19日
2. Junko Toyosawa (大阪教育大学) 他 Effect of psychological and demographic factors on the attitude toward information system for children tracking on the way to and back from school, The first Asia-Pacific conference on health promotion and education, 幕張メッセ, 平成21年7月18日

## 5-5. 新聞報道・投稿、受賞等

①新聞報道・投稿

1. 読売新聞 平成 24 年 3 月 11 日朝刊 防犯ブザーの所持に関する調査データとコメント (木宮) が掲載
2. 朝日新聞 平成 24 年 6 月 5 日朝刊「ネットで学ぶ安全 附属池田小事件教訓に」掲載
3. 朝日小学生新聞 平成 24 年 6 月 8 日 「大阪教育大 池田小事件から 11 年 安全をネットで学ぶ 教材開発」掲載
4. 毎日新聞 平成 24 年 6 月 1 日朝刊 「防犯教材でタグ 悲しい事件乗り越え 大教大付池田小と広島・矢野西小」掲載

5. AERA 平成 21 年 8 月 3 日号 (86-87 ページ)「家でサイトで狙われる少女」特集記事において調査結果の一部が掲載された

**5-6. 特許出願**

①国内出願 (   0   件)

②海外出願 (   0   件)

以上